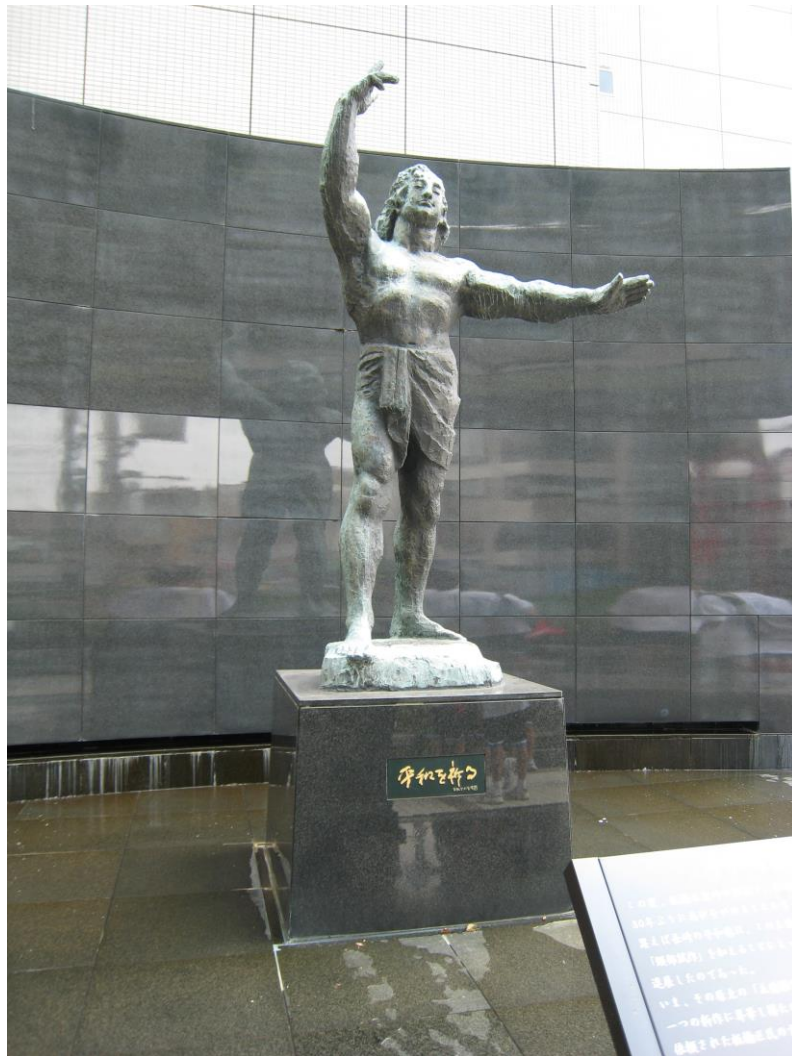


板橋区平和都市宣言記念事業
令和7年度 板橋区中学生平和の旅
感 想 文 集



板橋区役所正面玄関前 平和祈念像／北村西望 作

板橋区平和都市宣言記念事業実行委員会
(板 橋 区 ・ 板 橋 区 議 会)

板橋区平和都市宣言

世界の恒久平和を実現することは 人類共通の願いである
しかるに 現実には 核軍拡競争が激化の様相を示し 人類
の滅亡さえ危惧されるところである

われわれは 世界で唯一の核被爆国民として また 日本
国憲法の精神からも再び広島 長崎の惨禍を絶対繰り返して
はならないことを強く全世界の人々に訴え 世界平和実現の
ために 積極的な役割を果たさなければならない

板橋区及び板橋区民は 憲法に高く掲げられた恒久平和主
義の理念に基づき緑豊かな文化的なまちづくりを目指すとし
てもに 非核三原則を堅持し 核兵器の廃絶を全世界に訴え
平和都市となることを宣言する

昭和60年1月1日

板 橋 区

板橋区は、昭和60年1月1日に世界の恒久平和を願い、非核三原則を堅持し、核兵器の廃絶を全世界に訴える「板橋区平和都市宣言」を行いました。以来、この宣言を実りあるものとするため、現在に至るまで様々な平和都市宣言記念事業を実施し、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を訴え続けています。また、今年度は板橋区平和都市宣言40周年の節目の年度でございます。

「中学生平和の旅」は、『次世代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える』ことを目的に実施しており、今年度も被爆地である広島及び長崎に区立中学生を各22名、計44名を派遣しました。この感想文集は、平和の旅を通して学んだ貴重な経験と、現地を感じたそれぞれの「平和への想い」を自分自身の言葉で綴ったものです。

戦後80年が経過した現在、世界にはいまだ多くの核兵器が存在し、新たな兵器の開発も進められています。戦争による悲惨な体験を知らない世代が大半を占めるなか、この感想文集を一人でも多くの方にご覧いただき、「平和の尊さ、大切さ」に対する認識を深め、あらためて「平和」について考えるきっかけにいただければ幸いです。

板橋区は、「SDGs 未来都市」として、全ての国が取り組むべき普遍的な目標であるSDGs（持続可能な開発目標）の理念を見据えつつ、平和都市宣言記念事業を積極的に推進し、世界の恒久平和を実現するため、様々な機会を捉えて「平和の心」を発信してまいります。

最後になりましたが、本事業の実施にご協力いただきました、関係者の皆様方に心より感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

令和7年11月

板橋区長

坂本 健



目 次

ごあいさつ	1
-------	---

第1部 中学生広島平和の旅

1. 行程表	4
2. 団長感想文	5
3. 参加中学生感想文	6

第2部 中学生長崎平和の旅

1. 行程表	29
2. 団長感想文	30
3. 参加中学生感想文	31

第3部 資料編

1. 広島	
（1）広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	54
（2）平和宣言	56
2. 長崎	
（1）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典実施要領	58
（2）長崎平和宣言	59

■広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式出席議員

田 中 やすのり	議員	長 瀬 達 也	議員
間 中 りんぺい	議員	しば 佳代子	議員
岩 永 きりん	議員	荒 川 な お	議員
大 森 大	議員		

■長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典出席議員

元 山 芳 行	議員	山 田 たかゆき	議員
寺 田 ひろし	議員	中 妻 じょうた	議員
山 内 え り	議員	井 上 温 子	議員

第1部

第29回 中学生広島平和の旅



【参加生徒】

板橋第一中学校	市村 凜音	志村第四中学校	清水 美咲	桜川中学校	伊藤 唯乃
板橋第二中学校	藤巻 葵	志村第五中学校	佐藤 辰乃介	赤塚第一中学校	ジェン 晴輝
板橋第三中学校	重安 ななみ	西台中学校	稲垣 葵	赤塚第二中学校	志茂 結希乃
板橋第五中学校	星野 華蓮	中台中学校	藤本 かのこ	赤塚第三中学校	三野 琴音
加賀中学校	東 繫太郎	上板橋第一中学校	桶田 佑真	高島第一中学校	土屋 秀太
志村第一中学校	池田 莉乃	上板橋第二中学校	三反崎 雄琉	高島第二中学校	後藤 娃乃
志村第二中学校	勝又 一華	上板橋第三中学校	鈴木 愛実	高島第三中学校	鮎澤 日葵
志村第三中学校	南 菜月				

【引率者】

西台中学校 内田 善人校長（団長） 荒井 千尋教諭（指導員） 鈴木 廉教諭（指導員）

中学生広島平和の旅 行程表	
実施期間 令和7年8月5日～7日（2泊3日）	
8月5日（火）	
時 間	行動内容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:30	板橋区役所 発（都営地下鉄、J R）
8:03	東京駅 着
8:30	東京駅 発（新幹線）
12:30	広島駅 着
12:50	広島駅 発（市電で広島市役所へ）
13:20	広島市役所 着
13:30	★全国平和の集い受付
	★開会式（開会挨拶、参加自治体紹介）
14:00～17:00	★平和学習会（被爆体験講話、ワークショップ、発表）
	★閉会式
18:15	ホテル 着
19:00	夕食
22:00	就寝
8月6日（水）	
時 間	行動内容
5:00	起床
6:00	朝食
7:00	ホテル 発（徒歩）
7:10	平和記念公園 着
8:00～8:55	平和記念式典参列
9:30～14:00	市内見学（観光バス）・昼食
15:00	ホテル 着
16:00～17:30	班学習会
18:00	灯籠流し体験
19:00	夕食
22:00	就寝
8月7日（木）	
時 間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:20	ホテル発（徒歩）
8:30	平和記念公園 着（献花）
9:00～11:20	国立原爆死没者追悼平和祈念会館等見学
11:30	平和記念公園 発（観光バスで広島駅へ）
11:50	広島駅 着
12:35	広島駅 発（新幹線）
16:30	東京駅 着（J R、都営地下鉄）
17:20	板橋区役所着・解散式
★は全国平和学習の集い（広島市主催）	

「One voice. たとえ一つの声でも」

第 29 回中学生広島平和の旅

団長 内田 善人

(西台中学校長)

被爆 80 周年という節目にあたり、私たちは広島を訪れ、8 月 6 日に行われた広島市の原爆死没者慰霊式並びに平和記念式典に参加しました。式典において、こども代表による「平和への誓い」では、次の言葉が深く胸に響きました

「どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。」

「One voice. たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。」

この「語り継ぐ」という姿勢こそが、平和の旅の最も大切な意味だと思います。戦後 80 年が経ち、戦争を直接知る世代が少なくなる今、私たちが受け取った被爆の記憶を次世代へと伝えていくことは、何より重要な使命です。

今回の旅程では、広島平和記念資料館での見学や、被爆体験者の方からお話を伺う機会がありました。展示された焦げ付いた弁当箱や溶けたガラス瓶は、教科書で学んだ知識をはるかに超えた現実の重さを突きつけてきました。被爆体験者の言葉は、一人ひとりの人生と尊厳が戦争によって奪われたことを生々しく伝えていました。その「声」を、皆さんはどう受け止めたでしょうか。

原爆死没者慰霊碑に刻まれた「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」という碑文の前に立ったとき、私たちは加害と被害を超えて人類全体の課題として平和を考える責任を感じたことと思います。被爆地で体感した空気と祈りを、どう日常の生活につなげていくかが問われています。

平和の旅は、広島に行ったら終わりではありません。むしろ、これから始まります。皆さんが聞いたこと、見たこと、感じたことを、言葉や表情や態度で、友人や家族、学校や地域の人々に伝えてください。たとえ小さな一言でも、それが次の人の心を揺さぶり、さらに語り継がれていくのです。

平和を築く道は決して平坦ではありません。国際情勢を見れば、依然として紛争や核兵器の影が存在しています。しかし、だからこそ私たちは無力ではなく、学び、考え、語り継ぐことで未来を変える力を持っているのです。ホテルの 23 階で皆さんが熱く語ってくれた、それぞれの平和に対する思いを、形にしてください。

最後に、今回の旅を支えてくださった保護者の皆さま、学校関係者、そして板橋区平和都市宣言記念事業実行委員会の皆さまに、心より感謝を申し上げます。参加した 22 名の中学生一人ひとりが、この旅を通じて平和の担い手として成長したことを確信しています。

どうか皆さん、これからも広島での学びを胸に刻み、「語り継ぐ人」として歩いていってください。未来は、皆さんの手の中にあります。

平和を実現するために

板橋第一中学校 8年 市村 凜音

「今の生活は当たり前だ」と感じる人は多いのではないだろうか。しかし、現代を生きる我々が感じる「当たり前」は、当時の日本でそれはとても貴重なことであったのだと、この旅を通して感じるようになった。

今から 80 年前の 1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、人々が 1 日を始めようとしていた時、広島に原爆が落とされた。即死する人もいれば、長期にわたり苦しみもがいていた人もいたと聞く。

私は原爆が落とされた時の惨状や、今がどんなに幸せなことであるのかをさまざまな人に知ってもらいたいと思い、この広島平和の旅に参加した。8 月 5 日、板橋区役所に集まった代表生徒 22 人で被爆地、広島県へと向かった。広島県に着き、私の目の前に広がっていたのは、本当に原爆が落とされたのかと思えるくらいきれいな街だった。この日は他県の小中高生とともに平和学習の集いに参加し、被爆体験講話では被爆当時 12 歳だった笠岡さんからさまざまなお話を伺った。笠岡さんは「みんな仲良くすることが大切。仲良くすれば戦争はなくなるから。自分の意見も言い、人の意見も聞く。それは多数決で決めるのではなく、最も平和につながる意見を考える。」とこれからの未来を創る私たちに向けて、次の世代にも伝え続けてほしいと言っていた。その後のグループディスカッションでは、それぞれが住んでいる地域で起きた戦時中の出来事や、今その地域に住んでいるからこそ言えることなどを話し合ったことで、より戦争への考えを深めることができ、新しい知識をつける事ができた。

8 月 6 日の早朝、私たちは平和記念式典に参加した。8 時 15 分に 1 分間の黙とうが捧げられた。当時のこの瞬間に多くの尊い命が失われたことを痛感すると同時に、私たちが平和に生活できていることがどれだけ幸せなことであるのかを身に染みて感じた。小学六年生の人たちの平和の誓いのスピーチを聞いて、世界中の人々が平和について学ぶことが世界平和へと大きく近づくのではないと思う。

8 月 7 日には原爆ドーム、平和祈念資料館などを見学しに行った。原爆ドームは今も当時の状態で残っており、被爆した方々からのさまざまな願いがこもっているのだろうと感じた。また、平和祈念資料館では想像を絶するほどの痛々しい資料が並んでいた。焼けて破れた軍服、8 時 15 分で止まってしまった時計、放射線で黒くなった雨が染みつく板材など、その時人々がどのような状態だったのかを無意識に考えてしまうようなものばかりであった。特に原爆症のケロイドや死の斑点を見たときは、もし私が受けていたら…と考えると鳥肌が立つほどであった。

世の中には広島に落ちた原爆よりも威力が強いものなど合わせて 12,241 個もの核兵器が存在している。戦争を 0 にするのはとても時間がかかることだろう。だからこそ少しでも多く、さまざまな人に戦争について私達は知ってほしいのである。実際に被爆した国だからこそ言えることはたくさんあると思う。だからこそもっと積極的に戦争の悲惨さを世界へ発信することで、平和な世界を築いていく必要がある。私は最初に「今の生活は当たり前だと感じる人は多いのではないだろうか」と言ったが、これを読んでいるあなたに「今の生活は当たり前」なのかを今一度考えてもらいたい。

広島の日

板橋第二中学校 8年 藤巻 葵

今年、2025 年は、日本に原子爆弾を落とされてから、ちょうど 80 年目。大きな節目の年でした。平和記念式典にも、例年より多くの方が参列し、国籍に関係なく、たくさんの人々が平和への思いを馳せた、そんな大事な節目の年に、この中学生広島平和の旅に参加できたことは、素晴らしい運命だったと思います。

広島に向かった私たちを待っていたのは、想像を絶するような悲慘な過去の数々でした。1 日目に聴くことができた、被爆者の方のお話。当時の広島的情景や、目も当てられないような大火傷を負って亡くなった父、会えぬまま失った母への想い。そのすべてが、思い出したくない、辛い思い出を物語っていました。しかし、被爆者の方は、思い出すことが辛いあの日の記憶を、私たちに伝えようとしてくれています。世界平和実現のための私たちの使命は、その思いに応え、この記憶が忘れられてしまわないよう伝え続けていくことだと、改めて感じることができました。

その後も 2 日目、3 日目と、戦争や平和について学んできましたが、やはり 1 番印象に残ったのは、平和記念資料館に展示されていた、残酷な資料たちです。犠牲になった方の遺品や、当時の写真。それらはまるで、あの日の広島をそのまま切り取ってきたかのような、重い空気をまとっていました。その中でも特にショックを受けたのは、原爆によって強く焼かれ、亡くなってしまったご遺体の写真です。数え切れないほど多くの死者が出たことは知っていました。しかしそれでも、いざその姿を目の当たりにすると、気持ち悪くなるような戦争の恐ろしさが、ありありと伝わってきます。これが戦争なんだ、こんなにも残酷なものなんだ、と、受け止めきれないほど大きな衝撃を受けました。

戦争の記憶を伝えていくということは、決して簡単なことではありません。それをする私たちも、あの辛い過去を知り、受け止めなければならないからです。しかしそれでもこの旅は、核兵器はこの世に存在してはならないと強く教えてくれました。ひとりひとりの力は小さくても、みんなで力を合わせれば、どんな大きなことでも成し遂げられると信じています。核兵器をなくしたい、この思いを胸に、これからの人生を歩もうと思いました。

この広島での 3 日間は、とても長く感じました。それだけ濃く、充実した 3 日間でした。人生の大きな学びになったと思います。そして、原爆の犠牲になったすべての方が安らかに眠れるよう、心からお祈り申し上げます。

平和の旅に行って

板橋第三中学校 8年 重安 ななみ

広島平和の旅の3日間の中で一番印象に残っているのは原爆資料館です。原爆の被害を受けていても、残った衣服や、三輪車など遺物、白黒写真をみて、とても怖く感じました。その中でも特に印象に残ったのは、原爆の被害を受けて溶けてくっつき着物の柄のあとが付いてしまった女性の肌でした。これを自分に置き換えたら、とても耐えることのない痛みだったろうなと思いました。本当は見たくなくて、目をそらしたくなかったし薄目で見ることも考えたけれど、私が原爆の怖さを伝えなければいけないのでなんとか頑張って見て回りました。

原爆資料館へ行くにあたって、残された遺物をとおしてどんな人たちがそこにいたのかを想像することを目標としていました。展示されている原爆の遺物をみて、使っていた人がどんな生活をしていたのかがわかりました。絵がとてもリアルで、生々しくて怖かったです。資料館へ行く前、被爆を体験した方の話を聞いていて、そこで、ピカーンと光ってガラス片が刺さり、皮膚がただれて、病院へ行く列に並んでいる人は幽霊のように見えたと言ってくれて、だいぶ衝撃を受けました。その話を聞いているだけで、泣きそうになってしまいました。その話を先に聞いていたので、資料館で絵や写真を見るとき、このときはこんな事があったのだと思いながら見学することができました。資料館で怖いだけでなく、悲しいけれど、伝えるという使命を胸に刻んで見学することができたと思います。

灯籠流しでは、灯籠の紙に平和の象徴である鳩の絵や、いつもの日常を背景に描いたり、「平和な世界になりますように」と文字で書いたりして、たくさんの工夫をして完成させることができました。自ら流すことができなくて残念だったけれど、相生橋からみたら、灯籠の数がとても多くて、とてもきれいだったので、一生の一度の思い出として見ることで良かったと思います。私達が当たり前のように暮らしているこういう日に原爆が落とされてしまったのだなと思うと、今子どもが遊んでいるのが奇跡のように思え、とても感動しました。

私は今回の平和の旅で、韓国人原爆犠牲者慰霊碑などを見て、原爆投下で悲しい思いをしたのは日本人だけじゃない。だから異文化の方とも話すことが大切なのだと思います。諦めずに被爆のことを伝え続けたらいつか私達と同じように被爆者の思いをわかってくれるかもしれないからその日までたくさん話して、自分なりに頑張りたいと思います。

大切な日々

板橋第五中学校 8年 星野 華蓮

私は板橋区の平和の旅で第 80 回目の平和記念式典に参加しました。平和記念式典に参加するまでの道のりでたくさんのお店や建物を目にし、80 年前にこの場所に原爆が落とされたとは思えませんでした。しかし、全国平和学習の集いや平和記念式典に参加、平和公園を訪れ、戦争の恐ろしさや平和の尊さを肌で感じることができました。

1 日目は全国平和学習の集いに参加し、当時 12 歳だった笠岡貞江さんに話を聞きました。笠岡さんの話を聞く中で、原爆が投下されたことで多くの人が亡くなり、生活が一変、生き残っても怪我や病気に苦しみ、不安を抱えながら生きる人の大変さを知りました。笠岡さんが話をしているときの表情や泣きそうな声が印象深く残っています。当時の話や写真を見聞きし、やはり戦争はいけないと思い、自分ができることはなにか考え、実践し少しでも世界が平和に近づくよう努力しようと思います。また、他の自治体とのグループディスカッションで、広島県は毎年 8 月 6 日に登校し、戦争や平和について学習していることを知りました。いろいろな都道府県の自治体で平和についての学習が増えればもっと世界が平和に近づくのではないのでしょうか。

2 日目の平和記念式典では松井広島市長が「決して諦めない心」が大切だと言っていました。たとえ自分の意見と反対の人がいても、話す前に諦めず、一度話してみることが戦争が起きない平和な世界につながるということを学びました。また、式典には日本人だけでなく海外の人も多く参列していました。このとき私は、国内だけではなく国外にも平和を訴えていくことが改めて大切だと気づきました。その日の夕方、灯籠流しました。私は灯籠に「戦争が起きませんように」と平和への願いを込めました。灯籠流しはとても美しく、心が落ち着くようでした。こんなふうに平和で穏やかな時代が、これからも長く続くようにと願っています。

3 日目は平和記念公園や平和記念資料館を訪れました。平和記念公園にある、世界から核兵器がなくなるまで燃え続ける「平和の灯」を見ました。この「平和の灯」は世界から核兵器がなくならない限り燃え続けます。私は「平和の灯」を見て、この灯が消えた世界を見たいと思いました。平和記念資料館には当時の建造物や写真、衣服などがあり、私の想像をはるかに超える悲惨なものでした。特に原爆当時の被爆者の頭蓋骨の写真が印象に残りました。この写真は現実のものとは思えないほど悲惨で、私は改めて戦争が起きないようにできることから取り組もうと思います。

この平和の旅ではネットなどで調べるだけでは知ることができないことを学習することができました。平和は願うだけでは訪れず、行動しないと訪れないことを思えた日でした。これからはこの経験を活かし、自分から平和につなげられるよう行動しようと思います。

私たちが信じるべきこと

加賀中学校 8年 東 繁太郎

1945年8月6日午前8時15分。多くの人々の夢や希望、幸せを一瞬にして奪い去った原子爆弾。幽霊のような人々が目の前で水を欲しがる。与えるとそのまま目を閉じそっと息を引き取る。足元には折り重なる人の山。辛うじて命を留めた人々の眼の前には地獄の風景が広がっていたと言う。

「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」

これは広島平和公園内にある原爆死没者慰霊碑に刻まれた一節である。

原子爆弾が日本に投下されてから80年、世界はいまだ核兵器の脅威を克服できずにいる。未来を担う私たちにできることは何なのか、平和の旅の帰り道、東京へ向かう新幹線の中でずっと頭を巡らせていた。

残された被爆経験者も高齢となり、あの悲劇を自らの手で伝え続けることは現実的に難しくなっている。後世へと繋ぐバトンを、特に次世代となる私たちが積極的に受け取り、そして、原子爆弾による唯一の被爆経験国だからこそ伝えられる平和の尊さを、繰り返し世界に発信し続けることが使命だと思う。

そのためにも、まず私たち日本人全員が、過去のこと、広島・長崎のこと、といった認識を改める必要がある。戦争の歴史、原爆被害の歴史を自分のこととしてもう一度真剣に学び直すことで、初めて私たちは戦争・原爆という「世界の過ち」に対する意識の希薄化や無関心を遠ざけることができるのではないだろうか。

提案としては、各中学校で原爆について生徒全員で深く学習をする機会を設けること、そして毎年、各都道府県代表の中学校が集まり全国会議を行うことも良いと考える。また、中学校の修学旅行の訪問先には必ず広島か長崎を含めるようにすることで、若者全員が直接その地・その歴史に人生で一回は触れる機会を設けることも一つの方法だと思う。

世界を見れば、核兵器保有国は、アメリカやイギリス、フランス、中国、ロシアに限らず、インドやパキスタン、イスラエル、北朝鮮にも広がっている。イランでも開発が疑われている。日本の悲劇を目の当たりにしてもなお、世界は核兵器による脅しによってしか安全は確保できないという考えから抜け出せずにいる。私たち日本も、自ら戦争は起こさないと固く誓った一方で、再び悲劇に見舞われない保証までは得られていない。つまり、日本の将来の安全は、未来を生きていく私たちが自分たちの手で作っていかねばならない、「これから」の課題だと言える。

今年の広島平和の集いの標語は、「Peace for smile. Smile for peace (笑顔のための平和、平和のための笑顔)」であった。戦争は一瞬にして人々の笑顔を奪う。世界から争いを無くすことは難しいかも知れない。だが、国境を越え、人類としての安全への希望を、世界中で協力して考え続けることを諦めなければ、核兵器など必要ないものであることがいずれ分かる日が来るはずだ。私はそう信じている。

皆で核兵器のない本当の平和な世界を探していこう。

平和を願う人々

志村第一中学校 8年 池田 莉乃

私はこの平和の旅を通して、「なぜこんなにも多くの人が平和を願っているのに世界は平和にならないのだろう」と思った。

私は今回の広島平和の旅で戦争や原爆の悲惨さ、命の尊さを学んだ。この3日間で印象に残ったことがある。

この旅の最初に全国平和学習の集いというものに参加した。この集いには3日間で約2,000人もの人に参加するという。そこでは被爆体験者の笠岡貞江さんのお話を聞いた。1945年8月6日8時15分、一つの原子爆弾が落とされたことで人々の命、そして心が失われた。原爆が投下され多くの人が街中に倒れ、川にも死体が浮かぶ中誰もその人たちを助けようとはしなかったそうだ。当時の人は身も心もボロボロだったからだ。そのお話を聞いてとても胸が苦しくなり、原爆の恐ろしさを痛感した。グループディスカッションでは他の都道府県から参加している小中学生と平和について考えた。各都道府県で第二次世界大戦で受けた被害が異なるため、学校で行われている平和学習の違いがよくわかった。また私達には戦争や平和への理解が遅れていることを実感した。

2日目には平和記念式典に参加した。式典には約5万5000人が参加していた。その中には外国の人も多くいた。テレビなどで配信もされていたため、式典を見て、8月6日に平和を願った人は多くいたのであろう。夜には灯籠流しをした。そしてそこにも川の周りが人で埋まるほどの人がいた。灯籠もたくさん流れていて、それぞれ平和への願いがあることがわかった。

最終日の3日目には、平和記念公園と平和記念資料館を訪れた。平和記念公園には、原爆の子の像や動員学徒慰霊塔、韓国人原爆慰霊碑など60点以上の原爆の記念碑があった。これらも広島「あの日」を忘れないために人々が残した平和を願う証であろう。平和記念資料館では原爆投下後の悲惨な状況の絵や写真、被爆した物や服、広島復興までの道のりなど多くの展示を見学した。被爆して亡くなった人の遺品と写真、言葉の展示が一番心に残った。資料館にも多くの人がいて、外国の人が特に多かったという印象を受けた。

このように私はこの3日間で広島「あの日」や平和について思いを巡らせる多くの人と出会った。しかし、多いと思っていても足りないのだ。だから世界で戦争が続いている。実際私の周りの人に原爆や戦争に対する理解がある人は多くない。広島平和の旅に参加した私が、もっと多くの人が原爆や戦争について知り語り継いでいくことができるように伝えていきたい。

世界が平和になり、世界中の誰もが笑顔で幸せに暮らせるようになることを私は強く願う。

～平和へ向けて私達ができること～

志村第二中学校 8年 勝又 一華

私は戦後 80 年という大きな節目となる日に平和記念式典に参加するために、広島へと出発しました。広島を歩いていると、80 年前の惨状を感じられないほど活気づき、人々の温かい笑顔がいっぱいの町でした。しかし平和記念資料館や原爆ドームなど、戦争の恐ろしさが残る施設を間近で見ると、戦争が鮮明に感じられて恐ろしかったです。今から 80 年前、一瞬のうちに炎に包まれ、当たり前にいたはずの人々が大量亡くなった光景を見た人々はどんな事を思ったのでしょうか。私が広島に行き体験した事を伝えます。

1 日目、私達は「全国平和学習の集い」に参加しました。様々な地域から私と同じくらいの年齢の人が参加し、グループになって実際に戦争を体験した方からの話を伺いました。そこで聞いた事は、80 年前にこの地で起きた事とはとても思えませんでした。私と同じくらいの子が戦争のために働く「学徒動員」や「学童疎開」には、心が痛みました。被爆者の笠岡さんは、「戦争は我慢」と仰りました。多くの人が自分のやりたい事、夢を我慢し、戦争のために働いていたのです。そして笠岡さんはさらに「今は幸せ」と話しました。この言葉を聞いて、私はこの幸せな「今」を守るために、学んだ事を伝えていかなければならないのだと思いました。年々高くなる被爆者の年齢は、いつか当時の状況を教えてくださいという人がいなくなってしまうという事を表しています。戦後 80 年の節目に「戦争」について学んだ私達が、被爆者の方々の思いを繋ぎ、風化させない事が何より大切だと思います。

2 日目は「平和記念式典」に参加しました。子ども代表のスピーチの中で「同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。」という言葉が私の心に残りました。80 年前に起こった事を、時を超えて今を生きる私達が知り、学ぶことが大切だとわかりました。

3 日目は平和記念資料館を見学しました。平和記念資料館では、火傷や放射線に苦しむ人々の写真などが展示されていました。中でも、小さい女の子の写真とともに綴られた「怪我だらけになっていてもいいから、帰ってこないかなあ」という言葉が私の胸に深く突き刺さりました。家族や友人への心配や思いやり、愛が、その一言だけでひしひしと感じられ、思わず泣きそうになりました。大切な人が側にいて、学校に通えて、友達と些細なことで笑い合うことのできる幸せな今を守るために、与えられた機会の中で戦争について、当時を生きた人々についてより多くの事を伝えたいと思います。

平和の種をまく

志村第三中学校 8年 南 菜月

私は、「中学生広島平和の旅」に参加し、広島で原爆や平和について深く学ぶ貴重な機会を得ました。

一日目、全国平和学習の集いに参加。そこでは、被爆者の笠岡さんから被爆体験についての講話を聞いたあと、グループになり、意見交換をしました。講話を聞いているときは、それが自分が今まで調べてきた「原爆」の被害を受けた方の話だという実感が、正直あまり湧きませんでした。同時に、それほどまでに自分が原爆を遠い存在として感じていたことにも気づかされました。しかし、このような気持ちのままでは、被爆者の方たちが抱く「核兵器廃絶への願い」や「二度とこの過ちを繰り返さないでほしい」という強い思いを、他の人に伝えていくことはできないと感じたことが印象に残っています。

二日目、平和記念式典に参加。今年は広島に原爆が投下されてから 80 年という区切りの年であったため、例年より、多くの方が平和記念式典に参列しました。参列者の中には外国の方々の姿も見られ、原爆に対しての関心や被爆に対する哀悼の気持ちから参加したのだと思います。そうした姿から、広島の思いが世界とも繋がっていることを実感しました。子ども代表による「平和への誓い」では、原爆によって当たり前の日常が一瞬で失われた広島の過去を、二度と繰り返さないために、私たち子どもがその記憶を語り継いでいく必要があることを学びました。夕方には、灯籠流しに参加。国籍を問わず、多くの人々が慰霊と平和への祈りを込めて参加していました。静かな雰囲気の中、灯籠が川を流れていく様子は、日本ならではの美しく心に残る追悼の形だと思います。このような体験が世界中に広がれば、多くの方が平和について考えるきっかけになるのではないかと思います。

三日目、平和記念公園と平和記念資料館を訪問。静かで重苦しい雰囲気を肌で感じました。原爆がもたらした被害の大きさに圧倒され、展示されている被爆者の遺品や惨状を示す資料を実際に見ることで、命の重さや日常のありがたみを深く実感したことを覚えています。また、資料館で原爆の悲惨さや広島の復興について学ぶうちに、今後自分に何ができるのかを考えるようになりました。

はじめは原爆や戦争のことを遠い存在のように感じていましたが、三日間の学びを通してその考えは大きく変わりました。実際に被爆した現地を訪れ、被爆者の方のお話を聞き、資料館を見学したことで、平和の尊さを体験を通して理解できました。広島は、原爆投下という悲惨な過去を乗り越え、復興を実現した街です。この逆境を成長の原動力に変え、ここまで街が復興したことに感動しました。過去を風化させないために、小さなことでも何か行動を起こしていきたいと思います。そして、この経験を周りの人に伝えていきます。

争いをなくすためには

志村第四中学校 8年 清水 美咲

人類は誕生した瞬間から争いをしている。食糧、資源、土地。私達人間が常に必要とするものはどれも有限だ。命というものがこの世にあるどんなものよりも大切だということがわからず限りあるものを、命を落としてまで奪い合う。有限なものを必要とする限り人間は争う醜い生き物なのだろう。と、どこか投げやりで皮肉な考えをもってしまっていたのが平和の旅に参加する前の私だ。それでは今回の平和の旅のことをお話ししようと思う。

私は実際に人類史上初である、原子爆弾が投下された広島を訪れた。原爆ドームを見たとき私は生まれて初めて言葉を失うという感覚に陥った。そのくらい原爆ドームは本当に酷いものだった。周辺には瓦礫が散乱し、ほとんどの部分が骨組みだけになり、壁がひび割れるなどその姿は「廃墟」と言う表現がふさわしいだろう。

また平和記念資料館では戦時中の人々の苦しみをを感じる資料や遺品をたくさん見た。私はそれらの展示物を見るまで、80年前にこんなにも残酷なことが起こったということを信じていなかった。いや、信じたくなかったというほうが正しいかもしれない。それらは衝撃そのものを物語っていた。自分でも驚くほど足がガクガクと震えた。

だがある1つの展示を見たときだけ、腹の底から怒りが込み上げた。それは被爆者差別についての展示だ。原爆症がうつると言っていじめられたり、就職を断られたりした。いつ放射線で死ぬかわからないことを理由に結婚を断られたりした。ケロイドや傷跡をみて心無い言葉をかけたり、「赤鬼」「バケモノ」と酷いあだ名をつけて面白がっている人がいた。なぜ原爆で苦しんだ方たちがまた再び身勝手な人の言動によって苦しめられなくてはならないのだろう。

これはほかでもない被爆を経験していない私達全員の責任だ。誰かが傷ついていたら、手を差し伸べるのは当然のこと。皆で被爆者の方々を守り抜き、労るところから団結はきっと生まれる。「皆」が重要だ。たくさんの同じ思いを持つ1人たちが集まれば友情や信頼関係が築かれ、やがて争いが無くなる。

しかしながら集まるだけでは、願うだけでは争いは絶えないし平和は訪れない。だから平和学習会のグループディスカッションや数少ない被爆者の方の講話でもあった通り、まずは話し合うことが大切だ。自分の意見を述べ、他人の意見もしっかりと聞く。そして自分の意見と他人の意見が違っていても認め合い、リスペクトすること。話し合いの場には偏見も性別も年齢も人種もなにも関係ないと聞いた。確かにどんな人でも意見を考えて伝える権利がある。平和や戦争についての話し合いを重ねていけば戦争は減っていき、いつかは必ず無くなると思う。

人間は80年前のような過ちを繰り返さないように辛抱強く次世代に継承しようと必死に頑張っているし、いつだって夢や希望をそれぞれが抱き、それに向かって突き進む。そして何より言語が話せるし感性豊かでユニークなのだ。人間は醜い生き物なんかではない。人間は儚い生き物なのだ。だから人間のいろいろないいところを活かして生活する。ときには当時に思いを馳せて戦争を無くすための意見をガツンと伝えてみる。そうすれば、争いのない平和な道へのスタートラインにつけると私は信じている。

「国守りて、山河なし」

志村第五中学校 8年 佐藤 辰乃介

私は戦争、そして非人道的で史上最悪な兵器である原子爆弾のことを風化させないため、まずは戦争を知らない若い世代が学ぶことが大事だと考え、この旅に参加しました。また、戦後八十年となり、被爆者の方々も減ってきています。だからこそ今、被爆者の方からお話を聞くのが重要だと考えました。

語り部の方が家族を失い、あたり一面に死体が転がり、生まれ育った広島が焼け野原になった中で、勇気づけられたものが原爆ドームと草だったそうです。原爆ドームは被爆してもなお立ち続けているので分かります。ではなぜ草なのか。広島は熱線により全て焼け、放射線にさらされ、75年は草木も生えぬと言われていました。しかし被爆してからすぐに新しく草が生えてきたことから、自分たちも復興しようという気持ちになったことが理由だそうです。全てを焼き尽くした原子爆弾は許せませんが、そんな中、新たに生えた草から勇気をもらおうという考えは素晴らしいなと思いました。私ももっとポジティブに生きたいなと思います。

翌日、平和記念式典に参列しました。そこでは広島県知事の核抑止のお話が心に残りました。核抑止とは、国が核兵器を持ち、他の国を脅して、戦争をさせないということです。しかし決して脅しだけではなく、本当に撃つ可能性もあります。もし核戦争になれば核兵器による報復の連鎖となり、人も土地も甚大な被害を受け、全ての国が敗戦後のような状況になってしまいます。そのため、核兵器を保有するメリットはないと考えます。

また知事もおっしゃっていましたが、かつて日本がアメリカ・イギリスという大国に対して宣戦布告したように、力による抑止は破られてきました。核抑止も同じで、核保有しているロシアはウクライナと戦争をしており、未だに戦闘が続いています。また、核保有しているといわれる北朝鮮は韓国と休戦中で終戦ではありませんし、同じく核保有しているといわれるイスラエルもパレスチナと戦争をしていて、核抑止は破られているといえます。

だからこそ、ソフトパワーや外交をしなければならないと知事がおっしゃっていました。外国のアニメやゲーム、音楽、映画など、お互い文化を認め合うことがソフトパワーです。そうすれば仲良くでき戦争にならないと思います。例えば日本と

他の国が戦争となっても、相手の国民が日本の文化が好きなら国内でデモが起きて講和につながるかもしれません。私達にお話をしてくださった語り部の方も、他の人と仲良くして尊重し合えば戦争は起きないとおっしゃっていました。私は、このことを胸に、沢山のひとと仲良くしていこうと思います。そして、戦争の事実を伝えていかなければならないと考えます。



原爆はなにをもたらしたのか

西台中学校 8年 稲垣 葵

1945 年 8 月 6 日広島に原爆が落とされた日、多くの人々が大切なものを失いました。一日目に被爆者の笠岡貞江さんから原爆が落ちた日のことを聞きました。貞江さんのお父さんは建物疎開に出ていて生きているのかわからないほど丸焦げになっていて、当時は「水をあげると死ぬ」といわれていたので水を欲しがっていても飲ませなかったそうです。やけどをおっている貞江さんのお父さんの写真を見たときに私は絶句しました。下半身は肌の色が見えないほどに真っ黒で、背中にも大きな火傷の跡があり薬かわりの大根おろしの白い色が目立っていて人間が負っていい傷じゃないと思いました。貞江さんの“死にたくて死んだ人は居ない”という言葉聞いて原爆は本当に残虐で無慈悲なものだとあらためて感じました。貞江さんは両親を亡くし、当時 12 歳で私とそこまで年齢が変わらないのに全部子どもだけの力で生きていかなければならないことを強いられました。私は急にいつもそばにいた人がいなくなってしまうと思うとすごく怖いです。貞江さんは職や結婚もしにくく、後障害に悩まされ腕に穴が空き貧血も長く続いたそうです。貞江さんはお話をする中で、「被爆体験の話をするなかで、一番伝えたいことは何か？」質問に対して「戦争をなくしていき自分なりに考えて周りの人に伝えていくことが重要で若いからこそできることがたくさんある」とおっしゃっていました。私は原爆のことを伝える方法に正解はなく、相手に自分の思っていることや戦争の悲惨さを知ってもらうことが大切だと思います。

三日目の原爆資料館では、8 月 6 日のことが鮮明に残っていました。ボロボロになった小さい子の洋服や、三輪車などがあり一発の原子爆弾が落ちて一瞬にしてたくさんの未来が奪われていきました。燃え盛る火の中で水を求め川に入って死んでしまう人々の姿。現実で起きたとは思えないほど悲惨なものでした。子どもがひとりで生活をしなければならなかったり、生きていても差別され苦しい思いをする。見ているだけで胸が締め付けられ辛くなりました。

今回の旅で私はこのような悲劇を二度と繰り返してはいけないと強く思いました。平和記念公園内にあった慰霊碑に刻まれている死没者の数は考えられないほど多く、それだけの人が亡くなり戦争で命が軽く見られていたということです。戦争は何も生まないし、傷つけ合うだけです。この旅で、学んだこと思ったことを一人でも多くの方に伝えて核兵器がどれほどまでに悲惨で人々を苦しめたのか、自分たちが今当たり前だと思っている環境が凄く恵まれているということを伝えたいです。

360度の体験

中台中学校 8年 藤本 かのこ

「ってきます！」と言えば、「いってらっしゃい！」が返ってくる。帰ってくれば、家族が「おかえり」と出迎えてくれる。私達にとってはただの日常。

しかしこれが、80年前の「あの日」だったら。雲一つない暑い日に。食事を終えて、「ってきます！」「いってらっしゃい！」の声が聞こえたその瞬間。

想像できるだろうか。

さっきまで賑やかだった所が更地になり、綺麗だった服がボロボロになって、遠くから赤く大きな炎が襲ってくる。やっと我が家に帰れたのに、「ただいま」の返答はない。そこにあったはずの人も笑顔も希望も何もかも。

8月7日、平和公園内を散策した際のことだ。ガイドさんのお話を聞いて、耳を疑ってしまった。ここが家と人で溢れていた？この静かな広い公園が？と。

しかしいざその場に立って、目を閉じてみると、昔の人の賑わいや活気を想像することができた。今この地は、それらの記憶が安らかに眠っているのだ。

私は、見たままのリアルな感想を伝えたいと思い、あえて、多くの情報を調べすぎず、原爆資料館に出向いた。

持ち主に食べてもらえなかった黒焦げのお弁当。隣には、にかっと笑う少年の写真が飾ってあった。ぐにやりと曲がった小さな三輪車。後遺症に苦しむ、死んだ目をした姉弟やぼこぼこになってしまった背中写真。私はたくさんの遺物を目の当たりにして、ふと「あの日」を垣間見ることができた。痛みと驚きで叫ぶ人々や、誰かわからぬ遺体の数々。鮮明な炎が海のように広がり、崩れた建物と重なっている。これが「戦争」の現実なのだと、痛いほど分かった。

3日間の出来事はどれも、まるでVRで当時を覗いたかのような、360度の体験だった。テレビで解説を聞いても、新聞で写真を見ても、実感が沸かなかった「あの日」のことが、臨場感のある情報を通してくっきりと私の心に映し出された瞬間だった。これが、戦争に翻弄された人間たちの最期なのかと思うと、驚きと共に恐ろしさも感じた。

この体験をみんなに詳しく伝えたいと強く思った。もう二度と過ちを繰り返さないために。私にできることは「この日」の思いを語り継ぐことだ。

戦争のない平和を願って

上板橋第一中学校 8年 桶田 佑真

私が、中学生広島平和の旅を通して学んだことは、「原爆投下当時の恐ろしさや、残酷さ」です。この旅に参加する前から、原子爆弾の恐ろしさや、残酷さを知っていて、平和に対しての感心を持っていました。この旅に参加して、さらに平和に対して感心を持つことができました。

私が伺った笠岡貞江さんのお話では、当時高等女学校であった 12 歳の時、爆心地から 3.5km 離れた自宅で被爆を受けたそうです。1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、突然、目の前の視界の窓が一面真っ赤になり、大きな音がして窓が割れガラス片が飛びちって頭などに刺さってしまいました。笠岡さんの父は、当時外出しており、一発の原子爆弾によって体中大火傷をしてしまい、全身真っ黒になってしまいました。当時その話を聞いた笠岡さんは、父を見て全身真っ黒で実の父かもわからず、父の声を聞き、父だとやっとわかったそうです。私は、父かもわからないほどの火傷をしたと聞き、そのことを想像しただけで胸がゾワッとしました。

外に出ると近所の方々がみんな火傷をしていました。火傷をした人たちは、水が飲みたいと言って川に飛び込んだが、水を飲むとみんな死んでしまいました。

水を飲んだら死んでしまうということを知っていても、飲んでしまうほど辛かったのだと知りました。何故か調べたところ、いくつか原因はありましたが、喉も火傷をしており、水を飲んでしまうと火傷しているところに水ぶくれができてしまい、呼吸が苦しくなって窒息死してしまう人がいました。水が飲みたくても飲めないという悲しさや悔しさを知り、とても辛くなりました。

被爆者たちが病院に向かう姿が腕から火傷した皮膚がたれてそれが幽霊に見えてしまったそうです。

当時は色々なところに死体が放置されており、そのうちそれが当たり前になってしまい、今では考えられないほど残酷なことであって、死体が山のように積まれていた写真を見て、怖くて言葉も出ませんでした。

笠岡さんの、一発の原子爆弾によって「夢も希望も命と一緒に奪われてしまった」「もう二度と戦争などの馬鹿な真似はやめて、戦争のない世の中を作っていくということが大事だ」という言葉がとても実現させたいな、と思いました。

式典では、平和への誓いの、2 人の小学 6 年生のスピーチで、「たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです」という言葉を聞き、一人一人の思いが大事なのだ、と改めて思いました。

自分でも身近な人たちに思いを込めて伝えたら、どんどん広まり、いつかは戦争のない、平和につながると思うと信じています。この先、被爆者の一人もいない世界となってしまう時が来るので、私達が「被爆者の思い、体験」を伝えて、未来のみんなが、「戦争のない平和な世界」を「永久」に築いていきたいです。

「80年目」のヒロシマから

上板橋第二中学校 8年 三反崎 雄琉

「助けて」「水をください」。動く気力もない母親の胸にすがる幼児。「目を開けて、目を開けて」。子供の名前を呼び続ける半狂乱の母親。

1945年8月6日、広島に原爆が落とされたあの日。一瞬にして街は破壊され、多くの人々が何が起こったのかもわからないまま命を奪われた。生き残った人々も大切な人を失い、火傷でパンパンに膨れ上がった顔、だらりと垂れ下がった皮膚、血みどろの身体。変わり果てた姿で炎の中を逃げまどった。

その日から、ちょうど80年がたった今年、私たち22名は8月5日から8月7日までの3日間、広島平和の旅に参加した。広島駅を出て見た街はとても美しく、かつて一面に焼け野原が広がっていたとは思えないほどだった。

しかし、80年前のこの街は全く違う風景だった。それを一番強く感じた場所は、3日目に訪れた平和記念資料館だ。そこでは、これまで感じるできなかった戦争の悲惨さや、命の重みを痛感した。黒焦げになった体や青赤紫に変色した体、放射線による死の斑点が出た兵士、飛び出た目。資料館にあった展示物や資料は、今でも脳裏に鮮明に焼き付いており、当時の写真を見たときには、吐き気を催すほどの不快感を感じた。こんなことは、二度と起こってはならないと、心の底から強く思った。

そんな戦争と平和について自分一人が知っているだけでは戦争が絶えず、無数の命が犠牲になっている今の世界は何も変わらない。ではどうすれば戦争による被害者がいない世界が訪れるのか。“One voice.”これは、平和記念式典で平和の誓いを担当したこども代表の佐々木駿さんが言った言葉だ。この言葉には、「たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができる。」という意味がある。私はこの言葉を聞いたとき、より多くの人に、戦争の悲惨さや残酷さ、人道性、そして80年前に起きた事実を知ってもらい、周りの人たちのためにより多くの人々が行動することが、いずれ世界の平和につながると考えた。

しかし、被爆から80年が経つ今、本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、直接話を聞く機会は少なくなっている。そのため、私たちには、二度と同じ過ちを繰り返さないために、あの日の出来事に対する人類の記憶が気薄にならないよう、被爆者の声を次の世代に語り継ぐ使命がある。戦争の事実を知る。世界から戦争を取り除き平和にしようと声をあげ、少しだけでも行動する。そうする人が増えるように伝えていくことで、この世界は平和に近づいていくのではないだろうか。この旅は、そうした考えを持てるようになった一生忘れることのない「行動」になった。

広島の惨事を繰り返さないために

上板橋第三中学校 8年 鈴木 愛実

初めて訪れた広島で、私は非常に多くの学びと驚きを経験できました。広島市に在住する人々の戦争に対する意識の高さや想像を遥かに超える原爆の被害に圧倒されたことが強く印象に残っています。

8月5日は＜全国平和学習の集い＞に出席し、居住地や年齢の異なる人たちと平和について考えるグループディスカッションを行いました。広島市在住の方から、8月6日は学校に登校して黙祷をしたり一週間に一度は平和学習を行ったりするという話を聞き、戦争や平和に対する市全体の意識の高さに驚かされ、地域間の大きな差を知りました。

8月6日は＜平和記念式典＞に参列させていただきました。その中で子ども代表として演説を行ったふたりの表情や言葉には考えさせられました。「この世界を平和にしたい、戦争はしてはいけない」という思いがとても伝わってきました。人前で堂々と平和を訴えている様子は戦争や平和について常に自分たちで考えているからこそそのものなのだと感心しました。

そして8月7日は最も印象に残る日となりました。初めに訪れた＜平和記念公園＞では、納骨堂という80年経っても引き取り手のいない遺骨が眠っている場所に向かいました。ここには約7万人が納められていますが、本当の数は分からないそうです。それはどこまでがひとりの骨なのか分からず、スコップ1杯分をひとりと数えたからだそうです。本当に残酷で哀しい話だと思いました。遺骨を納めた人が何を思ってその数を数えていたのかと想像すると怖くて悲しくて堪りません。

次に＜平和記念資料館＞を訪れました。大火傷を負っている人、山積みになった人の骨、治療のため人の手によって切り裂かれたズボン、黒い雨を浴びたセーラー服など、沢山の写真や遺品が展示されていました。私は訪れる前からとても残酷なものを目にすると覚悟していましたが、言葉では言い表せない、人間世界とは思えない地獄絵図に衝撃を受けました。忘れることなどできません。時間が経っても覚えていなくてはならないし、二度とこの悲惨な出来事を繰り返してはならないと改めて考えさせられました。

この3日間の経験を通して戦争や平和に対する学びが深まりました。これからの時代を生きていく私たちは戦争がいかに残酷で醜いものなのかを知り、多くの人に伝えていく必要があると思います。そして二度とこの惨事を繰り返さないために行動しなくてはなりません。ひとりの力は微力でも私は＜板橋平和のつどい＞での体験発表を通して、戦争の悲惨さや平和の尊さを多くの人に知ってもらえるように、自分の学びや感想を詳しく伝えていきます。

平和とは

桜川中学校 8年 伊藤 唯乃

原爆ドームや資料館を実際に広島に行ってみて、私の中の考え方が大きく変わりました。

広島に行った当日は、実際に原爆にあった方のお話を聞くことができました。その方は当時、まだ子どもだったそうですが、一瞬にして家族や家を失い、今でも心の傷が残っていると、お話されました。話の途中、言葉に詰まりながらも「戦争は二度と繰り返してはいけない」と語ってくれたとき、とても胸が締め付けられるような気持ちになりました。その後、全国から集まって、小学生、中学生、高校生と同じグループになって、戦争や平和について語り合いました。そこで私と同じように、「相手国はどのような思いで日本に原爆を落としたのだろう」という疑問や、「もし、また同じようなことが起きたらどうしよう」といった不安を持っている人が多く、「平和がなくなるのが怖い」「今の世界が平和のままでいてほしい」という人がいてとても安心しました。そして私も、「平和を守りたい」という思いが一層強まりました。

二日目は、平和記念式典に参加しました。あたりはとても静かで、会場にはピリっとした空気感が漂っていました。私は黙とうのときには目を閉じて、亡くなってしまった人たちのことを思いました。目を開けると周りは真剣な表情で手を合わせていて、心が一つになった気がしました。その後は宮島観光をしました。厳島神社の大きな鳥居や、海や山に囲まれた景色を見ながらふと、「こんなにきれいな場所があるのに、なんで戦争をしたんだろう」と思ってしまいました。それを私が思えるのは、今が平和だからだと思います。そして平和な時間のありがたさを改めて感じました。

三日目は、平和記念資料館と、原爆ドームを見学しました。資料館には、焼け焦げた服や日記、原爆の被害を受けた方々の実際の写真が展示されていて、どれも目を背向けたくなる写真ばかりでした。でもこれは「現実」なんだと言い聞かせて、見学を終えました。原爆ドームを目の前にしたとき、思ったよりも大きく、そして重たい雰囲気が漂っていて、言葉が出ませんでした。今でもあのような建物が残っているということは、きっと、「忘れてはいけない」という思いが込められてきたからだと私は思います。

今回の旅で、戦争の悲しさ、原爆の恐ろしさ、そして平和の大切さを心から感じることができました。これは、何十年経っても語り継がなければならない記憶があることを、学びました。これからは、私が戦争について伝える側となり、この経験をずっと忘れずに生きていきたいです。

広島平和の旅を終えて

赤塚第一中学校 8年 ジェンセン 晴輝

私はこの広島平和の旅に参加して、平和の大切さ、戦争の恐ろしさについて学び、これから自分たちがどうすれば良いのかを考えることができました。

1日目、私たちは新幹線で、広島駅へ向かいました。そして路面電車に乗り、第一回全国平和学習の集いの会場へと向かいました。その時の広島は、本当に八十年前に原爆によって一瞬で地獄になった街だったとは想像できないような光景が続々と目に入ってきて、八十年前の様子が全然想像できませんでした。

午後は第一回全国平和学習の集いに参加しました。そこでは被爆体験講話や、ワークショップを通して、広島で起きたことの恐ろしさを初めて実感することができました。

2日目、朝早くから平和記念式典に参加しました。そこでは広島市民に限らず、世界中の人が参列しており、なぜここまで世界中にこのことが広まっているのかに対して疑問を抱きました。しかし広島市長の話などを聞いて、もう二度と同じことを繰り返してはいけないという強い思いが伝わってきて、疑問はなくなり、私達も世界中に伝えていかなければならないと思いました。

その日の夜には灯籠流しにも参加しました。灯籠にはいろいろな人の平和に対する思いのこもった言葉が書かれた灯籠がたくさん流れており、とてもきれいに光っていました。

3日目はまず平和記念公園を訪れました。平和記念公園では、その公園が昔は賑わっていた住宅街だったことや、建物一つ一つの歴史などについて教えてもらいました。また、当時そこに住んでいた他国籍の被爆者の方のお墓なども訪れ、原爆によって、日本以外の国籍の人たちも被爆していたことを知りました。そして、最後に平和記念公園で、みんなで折った折り鶴を奉納しました。

その後、平和記念資料館に行きました。平和記念資料館では、当時の様子がわかるものや想像を絶するような写真がたくさんありました。その中でも特に衝撃的だったのは、原爆によってなくなった方たちの頭蓋骨が並べられている写真です。その写真を一枚見ただけでも、この3日間で何回も聞いてきた「もう二度と同じ過ちは繰り返しません」という言葉の重みが伝わってきました。

この旅を通して、私は今、自分が何気なく過ごしている生活が当たり前ではないことがわかりました。また、平和とは一体何が平和なのかを考えさせられた二泊三日の旅でした。これから私は、唯一の被爆国である日本の国民として精一杯この旅で感じたことを広めていき、平和について考え続けていきたいと思います。

伝え続けていく力

赤塚第二中学校 8年 志茂 結希乃

原子爆弾の投下から80年。被爆者の方の平均年齢は86歳を上回っています。私は広島
の地に足を踏み入れて平和について学んできました。そこで考えたことは3つあります。

1つ目は原爆の恐ろしさです。被爆者体験講話で笠岡さんからお話を聞いて、亡くなった
方々と残された方々の痛みがひしひしと伝わってきました。記念資料館では目や鼻がなくな
ってしまっている人の写真や海にたくさんの遺体が浮かんでいる様子をあらわした絵、破れ
ている服に降り注いだ放射性物質を含んだ黒い雨などたくさんの展示物がありました。他に
も原爆ドームなどのコンクリートでつくられたことで残った被爆建造物に歴史の重みを感じ
ました。インターネットですぐ調べられるこの時代だけれど、現地に行くことでしか味わ
えない経験になったと思います。

2つ目は今の暮らしが貴重でありがたいものだということです。戦争を実際に体験した人
がどんどんいなくなっているこの時代。他国では今も戦争や紛争が終わらない中で、日本人
の戦争への意識や平和を尊ぶ姿勢は薄れてきていると私は感じます。8月6日の平和記念式
典での小学生の誓いの言葉にあった「あの悲劇を風化させず、記録として被爆者の声を次の
世代へ語り継いでいく使命が、私達にはある。」という一文には強く共感しました。同じ過
ちを繰り返さないためにも怖くて悲しいものであっても全ての人にこの事実を知ってもら
う必要があります。

3つ目は自分ができることについてです。今回、日本に初めて原子爆弾が落とされた広島
を訪れて現実から目を背けたくなるような事実にもきちんと向き合うことができました。戦
争が周りにはないことを当たり前に思わずに、「本当に幸せなんだな」と思いながら生活し
ていきたいです。私は家族や友達に学んできたこと、思ったことをたくさん話そうと思いま
す。そしてこの出来事を、「あの日」を絶対に忘れないように常に心の中に留めておきたい
です。

今、世界にある核の数はおよそ12,000個。そのうち、すぐに使えるものは4,000
個あり、威力は広島・長崎に落とされたものより何倍も大きいそうです。これ以上原爆の被
害を受ける人が増えないようにするためには伝え続けることが大切です。自分一人だけの力
で世界は平和にはならないけれど、行動していかなければならない使命が私達にはあります。
私達が語り継いでいくことによって、未来では「なんで戦争をするのだろう」と疑問に思う
ことができる人たちが増えていってほしいです。

「過ち」がもう繰り返されないことを祈って

赤塚第三中学校 8年 三野 琴音

私たちは8月5日から7日にかけての3日間、広島を訪れた。

80年前に原爆が落とされたとは到底思えないほど、広島はとても綺麗な都市だった。

1日目は全国平和の集いに参加し、被爆体験者の話を聞いた。思い出すのも恐ろしいと言うかのように被爆者の方が話す様子にぞっとした。似たようなものを見たことがあるというのに、絵や写真がなんだか恐ろしく感じた。具体的な数字やその時の状況を事細かに説明されると、なんだか当時の様子が像を結ぶようだった。その後のグループディスカッションでは積極的に発言し、真剣に取り組んだ。

2日目は平和記念式典に参加した。今年は被爆から80年という、節目の年だった。外国人を含む多くの方が今年は参列したという。8時15分から行われた黙祷では、丁度80年前にこの場所で悲劇が起こったということを実感した。その後の平和の誓いでは、小学生2人が「私たちが被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら平和を創り上げていきます」と話していた。私は、私よりも年下の子が平和への決意を表明していることに驚き、感銘を受けた。そして、私も「私たち」の中の1人になれるように平和について学んでいこうと思った。

3日目は再度平和記念公園や原爆ドームを訪れた後、平和記念資料館を見学した。記念碑に書かれている「過ちは繰り返さぬから」という言葉を見て、戦争、原爆に対しての人々の悔みを感じた。また、平和記念資料館では、原爆が落とされる前の広島から、その時の状況、原爆について、原爆が落とされた後のことまで被爆したものや当時の写真、絵が展示されていた。恐ろしかったの一言では片付けることのできない残酷さで、見ているうちに体調が悪くなってしまった。それでも、これを必ず伝えなくてはならないと、この現実から目を背けてはいけないと思った。「助けて」「熱いよ」「助けられなくてごめん」と叫んだ人々の声をなかったことにはしたくないと思った。

被爆体験者の平均年齢は86歳となり、被爆の体験を伝えることが難しくなっている。そのうち被爆体験者はいなくなり、人々は戦争の恐ろしさを忘れて過ちをまた起こしてしまうだろう。これからそうならないように、戦争の悲惨さというものを知った私たちが伝えていくべきなのだと思う。この平和を当たり前だと思わずに、平和の尊さを次世代に発信していきたい。

平和の構築

高島第一中学校 8年 土屋 秀太

僕は、この広島平和の旅で、全国平和学習の集いや、平和記念式典に参加し、灯籠流しなどを体験することで平和とはどのようなことなのかを学ぶことができました。

まず全国平和学習の集いで、被爆者の笠岡貞江さんが被爆体験講話をしてくださいました。笠岡さんは1932年（昭和7年）生まれで女学生1年生の12歳のときに、爆心地から3.8km離れた自宅で被爆しました。両親は市役所近くで建物疎開のお手伝いをしている最中に、被爆しなくなりました。建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぐため、建物を取り壊して空地を作る政策のことです。戦争中ではいろんな取り組みがされていることにすごいと感じました。

笠岡さんは、原爆が落ちたとき突然目の前の窓が真っ赤になり、ドーンという音と共に、粉々になったガラス片が身体に降り注ぎ、その状態で祖母と防空壕に逃げ込んだと語っていました。その後、防空壕から顔を出した笠岡さんの眼の前には、瓦が落ち、壁土が散乱していた街中で、やけどを負った人々が、口々に「光でみんなやられた」と叫ぶ様子が広がっていたそうです。笠岡さんは建物疎開に行っていた両親の帰りを待っていましたが、帰ってきたのは顔が腫れ上がり、身体中が真っ黒になった遺体でした。

翌年には、笠岡さんの腕に3つも大きな穴があき、半年以上治らず、貧血も続いたそうです。グループディスカッションでは他の県の人たちと交流しました。今自分の住んでいる地域での被害を伝え合い、被害が大きかったのは広島だけではないということがわかりました。

6日に行われた平和記念式典では、広島市長の平和宣言や広島市内の小学校の6年生の平和への誓いを聞き、黙祷を行いました。その日の夕方の灯籠流しでは、平和の願いが書かれた、たくさんの灯籠が川に流されていて、いろんな人たちの平和への思いが感じられました。

平和記念資料館では当時の様子や核爆弾の説明などがありました。実際被爆したときのものなど、いろんな展示物があり、悲惨なこの出来事で起こった原爆の恐ろしさと多くの命の犠牲を知り、平和の大切さを実感しました。

私は、この3日間で学び感じたことを、多くの人々に伝え「平和の構築」に向けて、自分にできることを探していきたいと感じました。

していかなければならないこと

高島第二中学校 8年 後藤 娃乃

8月5日から3日間。私は、戦争の悲惨さ、平和のありがたさなどを学ぶために第29回板橋中学生広島平和の旅に参加させてもらい、広島へ行ってきました。

1日目。広島に着いてすぐ向かった、全国平和学習会の集いは、被爆者の方のお話を聞いたり、年齢も暮らしている場所も違う人達と、戦争や核兵器、今の世界は平和か、などについて意見を交換し合ったりしました。

私の学校も、朝礼で今回のことをまとめて発表する機会があります。

でも、それだけでは伝わらないこともあるから、みんなで核兵器について勉強したりする時間をもらい、どう考えたかなども聞いて、共有してみたいです。

2日目。平和記念式典に参加する道で相生橋を通りました。相生橋は、原爆投下の標的になった橋です。1日目に被爆者の方からの、「原爆投下後。多くの人が水を求めて川に飛び込んだ」という話を思い出して、少しゾッと寒気がしました。

その後、参加させていただいた平和記念式典では、子ども代表・総理大臣・広島県知事・国際連合の方々のお話を聞きました。なかでも、子ども代表の「周りの人たちのためにほんの少し行動することがいずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか」という言葉から、「ちりも積もれば山となる」という、小さいことでも大きなことにつながるという言葉を出し、自分が伝えて行動することが、世界平和につながるのではないかということを考えることができ、とても心に残っています。

夕方に行った灯籠流しは、流すことはできなかったけれど、これからの世界が愛と平和で満ちていますようにという思いを込めて、代わりの人に託しました。

3日目。平和記念公園を巡りました。原爆ドームは原爆投下前の写真と見比べると、原爆の威力は一目瞭然。外側が全て破壊されていることが分かり、思わず口を開けてしまいました。平和記念公園は原爆の子・平和の灯など世界の平和に向けて祈るとても大事な場所がありました。自然が綺麗な公園で、原爆が落とされたとは思えないところでした。

そして、最後に行った平和記念資料館。見るだけでも痛々しい写真や当時の状況が書かれた看板を見ていくうちに辛い気持ち、心苦しい気持ちで見学をしました。ウェブサイトでわからないような核のおそろしさを目の当たりにしました。

私たちが現地で学んだことを、周りの人達に「伝え、行動していく」ことこそが私たちが愛と平和のためにしていかなければならないことだと思います。

現地の方から学んだヒロシマ

高島第三中学校 8年 鮎澤 日葵

当たり前の日常が、たった一発の原子爆弾によって壊される。そんな非現実のようなことが、1945年8月6日に起こった。私はこの日のことを学び、多くの人により詳しく、より鮮明に伝えたいと思い、この平和の旅に参加した。この旅で特に印象に残っているのは、広島に住んでいる方々のお話だった。

私たちは広島に着いて初めに、平和学習会に参加した。そこで私は生まれて初めて、被爆体験者の方を見た。被爆体験者の笠岡さんのお話は、悪夢かと思うほど悲惨で、残酷だった。自分の父が丸焦げになって帰ってきたこと。疎開から帰ってきた弟に、母が亡くなったことを知らせなければいけないこと。幽霊かと思うほどに皮膚がただれた人たちの列。どの話も心が休まることはなかった。戦争後も、被爆体験者というだけで差別を受け、思うような日常が返ってこなかった人たち。原子爆弾は、家族や未来、希望、人とのつながりさえも壊してしまうものなのだと思った。それと同時に、「もう二度とこの過ちを繰り返さないために私たちは周りにこのことを伝えていかなければならない」という気持ちを再確認できた。

二日目は、平和記念式典に参加した。多くの人に参加しており、会場に入るのに一時間もかかった。その中で印象に残ったのは、日本以外から来ている人の数だった。日本人と同じくらいいるのではないかと思うほど外国の方の人数が多く、原子爆弾の悲惨さは世界にどんどんと広がっているのだなと関心をもった。また、子ども代表の平和への誓いでは、ゆっくりと大きな声で語りかけるような喋り方が印象的だった。その言葉一つ一つに思いが込められていた。また、戦争を二度と繰り返さないために自分たちにできることを話したり、原爆が落とされたときの状況を話していたりと、その言葉の重みに鳥肌が立った。

二日目は移動の時間が多く、バスガイドさんの話を聞く時間も多くなった。バスガイドさんは、インターネットでは調べられなかったことを話してくれて、とても良い勉強になった。原子爆弾を投下した戦闘機、エノラ・ゲイの搭乗員は、広島が近づくにつれて口数が少なくなっていたこと。原爆ドームは取り壊されそうになったが、一人の少女が声を上げたことから今でも残っているということ。こういった話を聞いて、原子爆弾を落とした人、落とされた人たちの心がよく分かった。

三日目には平和記念資料館を訪れた。戦争について更に詳しく学べる貴重な機会だと思い、一日目に話をしてくださった笠岡さんの話やバスガイドさんの話を思い出しながら展示物を見た。原子爆弾によって焼け野原になった土地や全身の火傷により苦しんでいる人、家族をなくした人の思いなど、様々なものが包み隠さずに展示されていた。これらの展示物をみて、その人達の思いを想像してみると自分の目が潤んでいるのが分かった。この平和をいつまでも続けていきたい、と私はこの旅で思うことができた。私たちがここで学んだことをより詳しく、より鮮明に多くの人に伝えていくことが、平和への一歩となるだろう。

第2部

第13回 中学生長崎平和の旅



【参加生徒】

板橋第一中学校	金井 彩花	志村第四中学校	島 千晴	桜川中学校	本間 優理
板橋第二中学校	鈴木 萌々華	志村第五中学校	島田 結	赤塚第一中学校	佐藤 くらら
板橋第三中学校	深田 千晴	西台中学校	長谷川 瑞	赤塚第二中学校	樋爪 晴梨
板橋第五中学校	村上 柑菜	中台中学校	荒井 咲七	赤塚第三中学校	小向 風夏
加賀中学校	中山 紡	上板橋第一中学校	園田 すみれ	高島第一中学校	伊東 美翔
志村第一中学校	田畑 壮貴	上板橋第二中学校	野村 広葵	高島第二中学校	辻村 滋人
志村第二中学校	小澤 茉季乃	上板橋第三中学校	池田 桜彩	高島第三中学校	柴田 愛海
志村第三中学校	池田 莉世				

【引率者】

志村第四中学校 中村 嘉男校長（団長） 佐々木 冬以教諭（指導員） 山岸 杏実教諭（指導員）

中学生長崎平和の旅 行程表	
実施期間 令和7年8月8日～10日（2泊3日）	
8月8日（金）	
時 間	行動内容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:25	板橋区所 発（都営地下鉄）
8:30	羽田空港 着
9:50	羽田空港 発
11:40	長崎空港 着
12:00	長崎空港 発（観光バスで平和公園へ）
13:00	平和公園 着
13:50	★青少年ピースフォーラム受付
14:00～17:20	★開会行事（被爆体験講話会）
	★被爆建造物等のフィールドワーク（浦上天主堂コース）
17:40	平和公園 発（観光バス）
18:30	ホテル 着
19:30	夕食
22:00	就寝
8月9日（土）	
時 間	行動内容
6:00	起床
6:45	朝食
7:45	ホテル 発（観光バス）
8:50	平和公園 着
10:35～11:48	平和祈念式典参列
12:15	昼食
13:30～16:15	市内見学（観光バス）
17:00	ホテル 着
18:00	夕食
19:15	班学習会
22:00	就寝
8月10日（日）	
時 間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:10	ホテル 発（観光バス）
9:00	原爆落下中心地 着（献花）
9:30～11:00	長崎原爆資料館・追悼平和祈念館見学
11:10	原爆資料館発
12:00	昼食
13:00	長崎空港 着
13:45	長崎空港 発
15:20	羽田空港 着
15:55	羽田空港 発（都営地下鉄）
17:30	板橋区役所 着・解散式
★は青少年ピースフォーラム事業（長崎市主催）	

「平和という花の種を」

第13回中学生長崎平和の旅

団長 中村 嘉男

(志村第四中学校長)

8月8日から10日まで、今年度も平和の旅で長崎を訪れました。今年是被爆80年の節目にあたり、また被爆者の平均年齢も86歳となり、語り継いでいくにも限りある時間を意識せずにはいられない空気感が漂っていました。22名の各校の代表生徒たちも緊張感を高めて臨んでいるようでした。知識として様々なことを学ぶのは容易ですが、現地で多くの人々の思いに触れ、実際に惨劇のあった場所に来ることは大きな意味のあることだと改めて感じました。

1日目は、まず被爆体験者の三瀬清一郎さんのお話から始まりました。原爆の恐ろしさを想像するのも胸が痛む内容でした。原爆の威力の凄まじさだけでなく亡くなった方たちと隣り合わせの状況は、自分だったらと考えながらもとても受け入れられない現実でした。極限状態で人間の感情はどうなってしまうのか、悲しいとかいう言葉では表すことはできない、感情を失いながらも本能的に自分のすべきことを淡々とこなしていくしかない状況だったのかもしれません。三瀬さんからは最後に「平和という名の花の種を一粒ずつ会場にいらっしゃる皆さんたちに、今、話しながら預けています。平和の花が満開になるようになってほしい」というメッセージをいただきました。

2日目は平和祈念式典への参加です。朝からの雨も豪雨に変わり会場につく頃には皆びしょぬれになっていました。席について何とか落ち着きを取り戻した頃、不思議なことに雨はぴたりと止み、式典を待つ静寂がおとずれました。11時2分、黙祷を捧げ厳粛な気持ちになりました。特に印象に残ったのは「長崎平和宣言」としてお話をされた長崎市長のメッセージでした。「被爆80年にあたり、長崎の使命として世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に長崎を最後の被爆地にするために地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていく」という力強いメッセージでした。自分たちもこの思いを受け止めてできることを考え実行しなければという気持ちになりました。午後は、出島、大浦天主堂、グラバー園の市内見学を行い、近世日本の玄関としての長崎、近代産業の中心地である長崎をすべて坂道・階段の連続という地形とともに体感しながら長崎の人々に少しだけ近づけたように感じました。

3日目は平和公園爆心地で献花、折り鶴を奉げ、原爆資料館・追悼平和祈念館の見学を通してさらに理解を深めました。私たちも学んだことを語り継いでいきますという思いを強く持ちました。

3日間という短いながらも貴重な体験を通して、被爆者三瀬さんの言う平和の種を蒔き平和の花が満開になるよう一人一人の力は小さいけれど、しっかり伝え、継いでいくことを固く誓いたいと思います。

平和を繋ぐ

板橋第一中学校 8年 金井 彩花

1945年8月9日11時2分、長崎に原子爆弾が投下された。それにより一瞬にして多くの人々の命、生活が奪われた。原子爆弾から生き延びた人も原爆症に倒れ、今もその苦しみは続いている。今を戦前にさせないために、もう被爆者を出さないために、長崎を最後の被爆地にするために日本で団結し、世界に核の恐ろしさを更に発信していくべきと考える。

中学生長崎平和の旅一日目、この日は旅への緊張で一日中張り詰めていた。そのためか、空港で配られた弁当にはほとんど口をつけられなかった。長崎空港についた後、青少年ピースフォーラムに参加し、被爆者の方の体験を聞かせていただいた。当時は食料不足の状態が長く続き、さつまいもがご馳走となるほど追い詰められていたと知った。私は飛行機の中で弁当にほとんど口をつけなかったことをひどく後悔した。原子爆弾が投下された翌日、学校が焼却場、救護所として利用され、そこでも多くの人が亡くなった。その中には性別がわからないほどに血だらけの人や、苦しさのあまり自分を殺してくれ、と懇願する人もいたそうだ。言葉だけでも想像しただけで私は悲しく感じると同時に、戦争の恐ろしさを実感した。そして、三日目に訪れた原爆資料館で実際の写真を見た。私は恐怖で足がすくんだ。写真を目に焼き付けることで精一杯で、カメラに収めることができなかった。しかし、怖く感じるものから逃げようとしてしまえば、誰も戦争の事実を知ろうとしないまま他人事として終わってしまう。このような教科書にのっていない残酷な真実を知るために平和の旅に参加したというのに、それから目をそらそうしてしまう自分が嫌で、帰ってから自分を何度も責めた。それと同時に、若い世代の人が戦争に興味を持たないのは誰もが戦争の残酷な事実から目を逸らすからだということに気づいた。

被爆者が減る中で戦争の真実を伝える若い世代の人がいないなら、私が今一度原爆資料館で知った恐ろしい事実、被爆者の体験談を思い出し、しっかりと自分の言葉で伝え、平和を繋いでいく。それこそが私の役目であり、板橋区の代表としてその役目をしっかり果たそうと決意した。そして、最後に皆さんに伝えたい言葉がある。

「ノーモアナガサキ ノーモアウオー」

この言葉を一人ひとりが胸に刻み、世界の恒久平和を実現させよう。

被爆者のバトンを未来へ

板橋第二中学校 8年 鈴木 萌々華

私はこの平和学習で、あの日が本当に起こったことなのだとあらためて実感しました。1945年8月9日11時2分、長崎に原爆が投下され、一瞬にして多くの尊い命を奪いました。実際にあの日を経験した被爆者の方にお話を聞いたり、この目で被爆品を見ることは、教科書やテレビでは感じることはできない気持ちや光景でした。被爆者の方は原爆投下直後、太陽が近くにあるのではないかというぐらいの光に包まれ、爆音になったあと爆風がぶわっと押し寄せてきたと話していました。建物は吹き飛ばされ、人間は性別の判断ができないほどの有り様だったそうです。私は想像するだけで背筋が凍りました。原爆資料館で実際に写真を見てきましたが、言葉になりませんでした。私は学校で長崎、広島についての学習で初めて長崎に原爆が落ちたことを学びました。広島については知っていましたが、原爆が落とされたことしか知りませんでした。

私のようにこのことについて詳しく知らない学生が、今多くいると思います。私はこの学習で命の尊さ、平和のありがたさを実感しました。そしてこの気持ちや、被爆者の方の生の声をもっと多くの人に知ってほしいと感じました。また原爆が投下された8月9日は夏休みだったので夏休み明け、友達との第一声は「よく生きたね」だったと言っていました。楽しい話で盛り上がるはずの夏休み明けにこんな残酷なことがあるのでしょうか。きっと今を生きる私達にとって考えられないことだと思います。原爆が投下された出来事は私にとって他人事でした。私以外にもこう考えている人は多くいると思います。ですが、今もこの世界には核兵器が数多く存在します。そしてその威力は長崎や広島に投下されたものの数千倍にも及ぶ威力だと言われています。

日本は唯一の被爆国でありながら核兵器禁止条約に加盟していません。そして、被爆者の平均年齢が86歳を超えた今、私達が被爆者の方の気持ちや声を聞き、そのバトンを未来へ語り継いでいくことが大切だと思います。もう二度と、罪のない人の尊い命が奪われないように、永遠にあの日の出来事を、語り継いでいきたいです。そして私は、被爆者や原爆によってこの世を去ってしまった人のためにも日本が核兵器禁止条約に加盟する日を願っています。

私にできること

板橋第三中学校 8年 深田 千晴

被爆から80年を迎える今、被爆者は10万人を下回り、平均年齢は86歳を超えました。平和の旅に参加するにあたって事前学習をした際、当時の話を直接聞ける機会は長くてももう十数年しか残っていないという現実に改めて気付きました。いまのこの日常は当時の人の犠牲があり成り立っていること、当たり前を感じているこの幸せな日常を守るために、何が出来るのかを考えるきっかけになりました。

1日目の青少年ピースフォーラムでは、当時10歳で被爆した三瀬清一郎さんの体験講話を聞きました。爆心地から3.6kmという距離だったのにもかかわらず、家の中はめちゃくちゃ、また学校に行くと、性別がわからないほどに焼けた人がたくさん運び込まれてきたそうです。三瀬さんは、平和とは花の種でそれを満開にすることが夢だとおっしゃっていたのが印象に残りました。また平和は作り上げるもの、作り上げるにはコミュニケーションが必要だ、ともおっしゃっていました。

フィールドワークでは、戦争の傷跡が残る建物をガイドさんの話を聞きながら見学しました。これまでも戦争の悲惨さは学んできましたが、その時に思った気持ちとはまた違う別のより深い悲しみ、恐怖を感じました。

2日目に参加した平和祈念式典では、たくさんの方の平和への思いを聞きました。その中でも長崎市長の鈴木史朗さんの長崎平和都市宣言は、話し方が力強く、内容も感動しました。「はじめの一步は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。」という言葉は、三瀬さんの話にもつながります。大事なことは決して難しいことではなく、相手を知り、理解しようとする気持ちなのだと思います。自分の考えとは異なってもその考えの背景を理解し受け入れる努力をする、受け入れられない場合はその理由を伝え、お互いの折衷案を”一緒に”考えていくことが大切なのだと思います。

3日目に訪れた原爆資料館では、解説を聞きながら、被爆したお弁当や服、当時の写真などを見て回りました。最後の被爆者の訴えのコーナーは時間がなく、全てをじっくり読むことができず心残りでしたが、とても心が痛みました。

この旅に参加した私ができることを考えました。

- ・原爆によって亡くなった方の供養のため、思い出したくないことを次世代に引き継ぐために話してくれた方の思いに応えるため、また、二度と武力で争うことをしないために、一人でも多くの人につなげていくこと。
- ・花の種を満開に、つまり、人とのコミュニケーションを増やすこと。

平和祈念式典の長崎平和宣言でおっしゃっていたように、一人の力は小さくとも、それが結集すれば未来を切り拓く大きな力になると私は信じています。

“最後”であり続ける

板橋第五中学校 8年 村上 柑菜

あなたにとって大切な人は誰ですか。目をとじて大切な人を想像してみてください。80年前に被爆した人達にも大切な人がいたはずです。大切な人が怪我をし、命を失うということは想像を絶する悲しみだったでしょう。1945年8月9日午前11時2分、長崎上空で原子爆弾が投下されました。私達と変わらずに生きていた人たちはたった一つの原子爆弾によって笑顔、日常、そして7万人もの尊い命が一瞬にして奪われました。今回の旅は改めてそれが事実であること、そしてどれだけ平和が大切かを実感させてくれた素敵な旅だったと思います。

1日目は青少年ピースフォーラムで被爆者の方の話を聞いたり現地の方の話を聞きながら市内を回ったりしました。被爆者であり、昨年は平和祈念式典にて平和への誓いも務めた三瀬清一郎さんの被爆体験講話は深く胸に突き刺さるような話ばかりでした。1945年8月9日、突然ピカッと光り、しばらくして聞こえたドーンッという爆音と共に家の一部は吹き飛ばされ家の中は惨憺たる有りさま。体を震わせ、泣きながらお母さんを探し求めた三瀬さん。幸いにも家族8人が助かりました。被爆当時の三瀬さんは10歳。こんなに小さい子が戦争に巻き込まれていたという事実が心が痛みました。三瀬さんは私の話でもいから語り継いでほしいと仰りました。最後に「平和は人類共通の世界遺産です」と仰りました。加えて、「平和という名の花の種を広めて満開にしてほしい」と。心に響いたこの言葉たちはずっと大切にしていきたいです。

2日目は平和祈念式典に参加という貴重な体験をさせていただきました。この式典で一番記憶が鮮明なのは被爆者合唱です。被爆者合唱で歌っていた「もう二度と」の歌詞の中に『もう二度と作らないでわたしたち被爆者を』という歌詞があり、被爆者の方々がその歌詞をより強く歌われていて鳥肌がとまりませんでした。被爆者の方々がどれ程繰り返してほしくないか伝わってきました。

3日目はみんなで慰霊碑へ献花と折り鶴を捧げました。その後は原爆資料館へ行き、当時の悲惨な現状を目の当たりにしました。11時2分で止まっている時計、爆風や熱線によって曲がった鉄骨、溶けてくっついてしまった6本のガラス瓶、手の骨が付着したガラス、頭蓋骨が付着した鉄かぶと、正直目を背けたくなるようなものばかりでした。

3日間を通して学んだことは核兵器はどんな理由があっても使ってはならないということです。「広島が世界初という事実は変わらない。しかし、長崎が最後であり続けるには残された人々にかかっている。」これはインターネットで見つけて私の心に強く残った言葉です。核兵器は広島・長崎で過ごしていた人々の日常を一瞬にして破壊しました。もし、私達が住んでいる地域に核兵器が落とされたらどうなるか想像できますか。今、世界にある核兵器は80年前に落とされた原爆の数倍から数百倍の威力を持っています。広島と長崎に落とされた原爆であれ程の被害なので、甚大な被害をもたらすでしょう。被爆者の方々が恐ろしい体験を強く訴えているのになぜ核兵器は廃絶されないのでしょうか。被爆者の方々は核兵器廃絶を心から願っているはずです。被爆者の平均年齢は86歳。被爆者がどんどん高齢になっていく世の中でこの悲惨な出来事が風化しないように私は被爆者の思い・体験を後世へ語り継いで、核兵器が廃絶された世界を目指したいです。

今の自分達にできること

加賀中学校 8年 中山 紡

「世界平和は人類共通の世界遺産である」

この言葉は実際に 1945 年 8 月 9 日 11 時 02 分に被爆を経験した三瀬清一郎さんが言った平和への誓いの言葉です。自分はこの長崎平和の旅の 3 日間を通して平和について深く考えるようになりました。

一日目は実際に被爆した三瀬清一郎さんのお話を一時間ほど聞きました。当時の状況は話を聞いているだけでも怖くて想像を絶するものでした。血まみれで道路に横たわっている人、苦しきのあまり「殺してくれ、殺してくれ」と言う人、「水を、水を」と弱った声で言う人。人間の骨がそこら中に落ちていました。原爆後は何も食べられず食糧難でした。三瀬さんは明日も生きられるのか不安だったと話しています。

原爆が落とされた時は凄まじい量の熱線や爆風によって建物は一瞬にして破壊されました。時間が経過しても被害は続きました。放射線によって髪が抜けたり、病気を引き起こしたり、差別を受けた人もいました。何の罪もない人がなぜこんな目に合わなくてはならないのか、恐ろしくてたまりません。

二日目は平和記念式典に参加しました。原爆が落とされた 11 時 02 分～11 時 03 分の間に参加者全員が黙祷を捧げました。二日目も実際に被爆した西岡洋さんのお話もありました。

西岡さんは、「級友の友達の下敷きになっていた。ただ、その級友はガラスなどが刺さっていた。そのおかげで自分は無傷ですんだ。」と話しています。一発の原爆によって最愛の友だち、家族が失われてしまうということが、どれほどの恐ろしさだったのかがわかります。

三日目は原爆資料館を訪ねました。当時の写真や遺品は見ているだけでも原爆の辛さ、恐ろしさがわかりました。ある写真は自分のお母さんが地面に倒れて亡くなっていたり、亡くなった弟を背負い、焼き場で順番を待っている兄。ぼろぼろになった学生服や弁当箱。熱線によって曲がった鉄。資料館にあるすべてのものが原爆の恐ろしさ、残酷さを表現していました。原爆が落とされる直前まで人々の普通の暮らしがあったのです。命が確かに存在していたのです。

ガイドさんからは長崎に原爆が落とされた理由を聞きました。東京、大阪などの都市は大空襲によってすでに焼け野原になっていたのも、アメリカは原爆の威力を試すのに適していないと判断し、広島と長崎に原爆を落としたと話していました。

長崎に落とされた原爆の名前、時刻、被害の大きさなど詳しく知らなかったことが多かったけれど、この 3 日間で学びを得、これから自分たちが何をできるのか考えるようになりました。

被爆者の平均年齢が 86 歳と高齢になってきています。あの日を忘れないように、確かに存在した人々の命の物語を伝えていくことが今の自分達にできることだと思います。

「泰平」の願い

志村第一中学校 8年 田畑 壮貴

8月9日。長崎は、朝から大雨だった。平和式典が行われるので、少し残念に思ったが、80年前だったらどんなに喜ばれただろう、と考えずにはいられなかった。それは、被爆者の方のお話しがとても印象に残ったからだ。

被爆体験講話会では、被爆者の三瀬清一郎さんが原爆の恐ろしさについて語ってくれた。三瀬さんは、戦争中、「明日は生きているだろうか」と毎日不安だったそうだ。そして、投下された時の状況をこう語っていた。「まるで地獄のようでした。男か女かわからないくらい血だらけだった死体がたくさんありました。全身やけどを負った人たちは、下の川に飛び込み、そこはたくさんの人であふれていた。」実際に、現在の下の川を目の前で見たが、そのようなことが実際に起きていたことが信じられなかった。そして、当たり前前に過ごしている毎日がとても幸せなことだと実感した。このような平和を世界へつなげるために、核兵器廃絶、現在、戦争しているところを終戦させることが大切だと思った。

平和祈念式典では、原爆により壊れた浦上天主堂の鐘が、80年の月日を経て修復され、長崎の地で鳴り響いた。「平和の願いを世界と共に実現していきたい」「人類は核兵器をなくすことができる」という長崎市長の強いメッセージ、「クスノキ」の合唱など、平和式典で平和の大切さと、原爆の脅威について印象深くなった。そして、世界で原子爆弾を所持している国に、このメッセージがとどきますようにと思った。11時2分、原爆が投下された時間から1分間の黙祷をした。長崎では、「県民祈りの日」と定められ、黙祷を捧げることになっている。僕はこれから、このようなことがあったことを決して忘れないためにも毎年、黙祷をしようと思った。

今まで、原爆について聞いたり、本を読んだりした時、広島のことが多かった。僕は、この旅に参加するまで長崎について、何も知らなかったが、事前学習とこの3日間でたくさんのことを学んだ。広島に落とされた原爆よりも1.5倍の威力があったにもかかわらず、長崎の地形のおかげで広島より被害が少なかったこと。それでも、一瞬にして、たくさんの方の生活と尊い命などを失ったこと。僕は、平和の旅に参加した後で、戦争や平和に対する意識がだいぶ変わった。だからこそ、この旅で見てきたこと聞いたことを、興味を持ってもらえるようにたくさんの方に伝えられたらと思う。

普通の生活とはなにか？

志村第二中学校 8年 小澤 茉季乃

私達は、今、温かい布団で眠り、温かいごはんを食べ、宿題をしたり、仕事をこなしたり、しながら生活を送っています。私はこの長崎平和の旅に参加するまではそれが普通の生活だと思っていました。

平和の旅の初日、被爆者の方のお話を聞きました。当時10歳だった被爆者の方は、8月9日午前11時2分に爆心地から3.6kmの屋内で被爆しました。原爆が投下され、家の中を見渡すと、壁やふすまにガラスの破片が刺さっていて悲惨な状況だったといえます。また、当時通っていた小学校に向かうと、男女の区別もつかない血だらけの死体、触ったらぼろぼろになってしまう炭のような死体で校庭が埋め尽くされていたり、指の小さい骨がたくさん落ちていたりして、長崎はどこもかしこも惨憺たる状況だったといえます。言葉だけでも伝わるこの悲惨さを見逃してはなりません。皆さんは考えられますか？自分の家から一番近い学校に誰かもわからない死体が転がっている状況を。正気ではられません。その上、一命をとりとめた被爆者も原爆が落とされた日から食べ物がない日が続き、水みの生活でした。かろうじて得ることのできた食材は川の魚や野イチゴだったといえます。また、原爆による放射線でも今もお苦しんでいる方々がたくさんいます。被爆者の方は、当時だけではなく今も肉体的精神的な苦痛を負っています。この悲惨な事実を私達はどのように伝えなければならないのでしょうか。

2025年1月時点で核兵器が約1万2000発保有されています。今でもロシアによるウクライナ侵攻やガザ地区での紛争が続いていて、いつ核兵器が使われるかわからない世界です。80年前に起こった出来事をもう二度と繰り返さないように世界唯一の被爆国民の私達が世界に発信し、伝え続けなければなりません。

2024年に日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞しました。この受賞は世界に原爆の悲惨さを知らせる大きな受賞になりました。世界的にも有名なノーベル平和賞を受賞したことによって世界に大きな影響をもたらしました。しかし、今の私達が平和の旅に臨み、これだけの功績を残せるかと言われたら、そうではありません。もちろん世界に発信することはとても大切です。しかし今できることは、私達が住んでいる平和都市宣言を掲げている板橋区のみんに私達が学んだことを伝えることだと考えます。家族や友人、そして地域の方々に伝える、これは微力かもしれませんが無力ではありません。

この小さな一歩が世界の恒久平和につながっていくのではないかと思います。冒頭に書いた普通の生活は戦争時、原爆投下時には普通の生活ではなかったです。今の日常がどれだけ素晴らしいものなのか、ありがたいものなのか、考えてみてください。

長崎を守り続けて

志村第三中学校 8年 池田 莉世

私はこの3日間で改めて平和がどれだけ大切かということを知った。

私たちは青少年ピースフォーラムに参加した。そこで被爆体験者三瀬 清一郎さんの当時のお話を聞かせていただいた。当たり前の日常がたった一つの原因により壊されてしまう。授業中も睡眠時間も遊ぶ時間も私達は不安もなく過ごしている。その当たり前が80年前は違う。授業中はいつも訓練、寝ていても空襲警報が鳴れば起こされ防空壕に入る。わたしたちには考えられない毎日が当時は日常だった。B29が頭の上において爆弾がいつ落ちてくるかわからない。そんな不安を抱きながら過ごしている。

そして8月9日11時2分原爆が長崎に落とされた。中心地にいた人たちは即死、少し離れていても暴風によりガラスの破片や物が飛んできて怪我をし、熱線により火傷する。病院は暴風によって壊され、怪我をしていた人たちは小学校の真夏でとても暑い体育館まで運ばれる。体育館の中は人のわめき声しかなく地獄だったそうだ。火傷した人たちの皮膚はドロドロに焼かれている。水も薬もなくただ寝ているだけ。そんな日々が続く、人々はその辛さから解放されるよう、殺してくれと言いつづけていた。救護が間に合わなくなり人々が亡くなっていき校庭で勝手に焼かれてしまう。原爆が落とされた中心地の建物は跡形もなくなっていた。地表面温度は3,000度～4,000度に達していて人々は焼け焦げで真っ黒になっていた。今の日本では想像もできないような光景が広がっていた。そしてこの原爆により放射線の影響も多くでた。放射線は匂いもせず見えない。人は放射線の影響をすぐに感じる事ができない。放射線は細胞を壊し、癌、下痢、脱毛などの害を及ぼす。人により、放射線の影響が出る速度は違い、10年後に癌になる人、苦勞する人が多くいる。長崎の原爆により亡くなった人の数は7万4000人、怪我をした人の数は7万5000人。私達にはわからない想像もできない原爆は当時の人からすると、とても地獄でご飯もお水もない。水を求めて川まで歩き、その途中で這いつくばって亡くなっている人がたくさんいた。食べられるものも限られていた原爆投下後はとても辛くきついものだったそうだ。

私はこの話を聞き私達の当たり前が80年前の状況からするとなんの苦勞も不安もないとても幸せな生活だと感じた。家があるのも、ご飯が食べられるのも当たり前ではない。原爆の話や戦争の話を聞かなければ思いもしない当たり前の喜び。私はこの「平和」について学校代表として学べたことをとても嬉しく思う。この学習をきっかけにはじめの私のように「当たり前が当たり前にある」そう思っている人々にこの話を私の口から私の言葉で伝えていきたい。

平和学習を終えて

志村第四中学校 8年 島 千晴

私は長崎の旅で被爆した方のお話、 平和祈念式典への参加、原爆資料館の3つが深く心に残りました。

講話会では被爆した三瀬清一郎さんのお話を聞きました。一番印象に残っている話は人が炭になっていた話です。三瀬さんは原爆が落とされた数日後、学校を見に行ったら校庭に炭になっている人を見たそうです。私は学校の移動教室で30分かけて松ぼっくりを炭にしたことがあります。人間が一瞬で炭になる、その原爆の熱線の凄まじさは想像をはるかに超えるものだと思います。「平和とは当たり前の生活ができるということ」これは三瀬さんの言葉の中で私が一番心に残っている言葉です。私はこの言葉を聞き、当たり前の事を守れば平和につながっていくのではないかと思います。また「一人一人に平和の花の種を渡した」この言葉も印象に深く残っています。私は平和の花は世界平和、その種は世界平和への一步、小さな平和のことだと思います。私達が周りの人に戦争やこれからの平和について伝えることで、三瀬さんから受け取った種を渡し、いつか沢山の人の心に平和の花の種が届き、平和の花が開花する。それは平和への一步に近づく、世界が平和になるということだと思います。

原爆資料館では印象に残る展示品がたくさんありました。骨が付着したヘルメット、白血病により肥大した脾臓、娘が母親を焼いている写真。私がその人だったらと考えると心が痛くなるものも数多くありました。人が蒸発して影になっている写真では原爆の威力に唖然となりました。原爆の模型を見てみるとプルトニウムが手のひらくらいの大きさでとても驚きました。手のひらサイズのプルトニウムが8月9日だけでも約7万人の人を殺し、その後亡くなった方を含めて約20万人の方を犠牲にしたと考えると本当に恐ろしいものであると痛感しました。

私は平和の旅に参加する前は、原爆は怖いものと思っていました。しかし旅を通して原爆や核兵器はこの世に存在してはいけないほど危険なものであるということがわかりました。これから私は自分の口で沢山の人の戦争や原爆、平和について知ってもらえるように活動していきたいです。そして今後、平和の旅で体験したことをもとに私達の未来や世界が平和になっていくためにはどのような事ができるのかを考えながら生活していきたいです。

日常の尊さ

志村第五中学校 8年 島田 結

「よく生きてたね」から一日は始まった、と三瀬さんは語った。

8月9日11時2分。被爆者の三瀬さんはその当時、家で8人の家族と過ごしていた。母と祖母は家事をし、三瀬さんはオルガンをひき、兄弟はあそんでいた。三瀬さんがオルガンを閉じた瞬間、太陽が落ちたような光と畳が吹き飛ばすほどの爆風が家の中を通り過ぎた。

家族全員無事だったが、窓ガラスは飛び散り、家の中は悲惨な状態だった。三瀬さんが外で見聞きしたのは、なにもかもなくなった町と水を求める声だった。

そして8月15日。ラジオで日本は戦争に負けたと報道された。何日か経ったころ、学校が始まった。久しぶりに会った友達との最初のあいさつは「おはよう」でも「久しぶり」でもなく、「よく生きてたね」だった。

また会おうと約束したのに。一人だけいなかった。先生が言った。「原爆で死んだ」と。

自分が三瀬さんのこの話を実際に聞いて考え、感じたことは2つある。

1つ目は、一つの原爆により日常が簡単に壊されてしまうということだ。朝起きて、ご飯を食べる。毎日繰り返す日常。だが80年前の原爆が落ちたとき、一瞬で日常ではなくなってしまったという事実にとっても胸が苦しくなった。寝ているときも怯えなければいけなかった空襲警報のサイレン、お腹が減っても食べるものがない日々。それなのに必死に生き続けた人々。その被爆者たちの想いを引き継いでいかないといけないと深く感じた。

2つ目は、友達、家族が自分のそばにいることの幸せだ。

「またね」「また明日」。明日も当たり前に出会えるから言える言葉だ。それが80年前は当たり前ではなくて自分が明日も生きているか分からない毎日だったことを知り、今、自分が生きることができていて友達も家族もいることがどれだけ幸せなのか感じた。

今年、被爆者の平均年齢は86歳になり、原爆の恐ろしさを知識ではなく実際に体験した人が実話を伝えることは難しくなっている。こんなに人々の大切なものを奪った原爆は二度と落とされてはいけなし、落としてもいけない。原爆は誰一人として幸せにさせないから。そのために平和の旅に参加し、被爆者の方の話を聞いた我々中学生が、当たり前の幸せ、平和の尊さについて深く考え、伝えていきたい。

日常は奇跡

西台中学校 8年 長谷川 瑞

中学生長崎平和の旅から帰ってきて、ふといつもの日常が戻ってきました。朝起きて、部活に行き、友達と笑い合い、家に帰って温かいごはんを食べる。

今まで当たり前だと思ってきていたそれらは、今、全く違った光景に見えるようになりました。私にとって長崎は「日常」という概念を一から考え直す機会を与えてくださったのです。

3日目の原爆資料館で見た、溶けた瓶や真っ黒になってしまったお弁当箱。それは、無機質な展示物ではありませんでした。かつて私たちと同じように学校に通い、未来に希望を描いていた少年少女たちの日常が、いかに脆く、一瞬にして消え去るものなのかを力強く訴えかけていました。学校で授業を受けて勉強し、友達と遊ぶ、ごく普通の生活。その生活が、残酷な一瞬によって永久に失われた事実、私は絶句しました。

爆心地に立ったときには、なぜ？という問いが頭と心の中に渦巻きました。なぜ、これほどの悲劇が起こり、大勢の未来を奪われなくてはいけないのか。この問いに答えはないと思います。しかし、そのなぜだろうと考え続けることが平和への第一歩だと悟りました。平和とは誰かから与えられるものではありません。私たち一人ひとりが問いかけ、行動によって維持される、絶えず変化し続ける考え方なのです。

長崎平和の旅で私が最も考えさせられたのは「日常」とは何かです。被爆者の三瀬さんという方にお話を伺った際、今の日常を大切にという内容を静かに語ってくださいました。当たり前のように満喫している日々は、多くの犠牲と平和の積み重ねによって成り立つ、二度とない奇跡の連続だと考えます。日々の感謝を忘れずに今を丁寧に生きること、それこそ平和を未来に繋いでいく私にできる方法だと信じています。

この旅は私に人生の道標を与えてくれました。長崎で見て、学び、出会った人々の想いを胸に、これからも「日常」という名の奇跡を懸命にそして、大切に生きていきたいと思います。あの場所で失われた無数の命、日常を私たちが語り継ぎ、平和を繋いでいく責任をしっかりと果たしていきます。



「当たり前」ではない“平和”

中台中学校 8年 荒井 咲七

私は今回の長崎平和の旅を通して戦争・原爆の恐ろしさをより実感しました。被爆者の三瀬さんのお話を聞き、原爆が落とされる前に三瀬さんがしていたことや原爆が落とされた瞬間のこと、原爆が落とされた後のことまですべてを語ってくれました。このようなお話はたくさんしてきただろうし、原爆の話をするのはとても辛いことだと私は思います。けれど、原爆を体験した人はその恐ろしさを知っているから、被爆者の平均年齢が86歳という今、少しでも多くの人にこのことを伝えて未来に繋いでいき、もう二度と戦争をせず、平和を守り続けるために、頑張っているんだと思いました。三瀬さんは被爆者が少なくなっているこの世の中でいつかは被爆者のお話が聞けなくなるので、ビデオを残して未来の人々にも伝えていきたいと考えているようです。ものすごく細かく話してくださり、三瀬さんの話し方が当時のことを想像させられる話し方でわかりやすかったです。原爆の恐ろしさを教えてくれたのは、これだけではありません。原爆資料館や式典などにも参加して、教科書では学べないようなことも学びました。原爆資料館には、原爆が落とされた後の資料がたくさんおいてありました。人や食べ物もう真っ黒になっていて、生きていても多くの人が皮膚にやけどをしていたり、放射線の影響で何年か後に症状がでた人もいて、苦しみのあまりに「殺してくれ」という人もいたとのこと。このような被害を受けて、日本ではもう戦争をしないと誓ったけれど、世界から核兵器をなくすのは難しいそうです。日本では、式典や原爆資料館、学校の授業で取り上げられたりしますが、世界にとっては他人事で、悪いことをしたと思っている人は少ないのかもしれない。なので、世界にはまだ核兵器は1万2000発が保管されている状態です。これを減らすためにはもっと世界の人に伝えていかないとはいけません。けれど、私達が世界の人たちにこのことを伝えていくのは相当難しいことです。だからこそ私達は、少しでも多くの人達に知ってもらうため、学習したことを発表したり、話したりしてまずは自分の周りにいる人達に伝えていきたいです。世界を平和にしていくのが大きな目標ではありますが、今の世界は全世界が平和かと言われたら平和ではありません。私達は毎日お腹いっぱいにご飯が食べられて、勉強もできて、友達と遊ぶことだってできています。日本では平和は当たり前かもしれないけれど、このまま平和が続くとは限りません。被爆者の方々がいなくなってしまったら、また繰り返されてしまうかもしれない。このような中で次は私達が引き継いでいかなければならないのです。被爆者の方々が減っていく中でも、一人ひとりが戦争についてきちんと知り、平和や命の尊さを伝えていくことで少しでも世界平和に近づいていくのではないかと考えました。

平和の大切さ

上板橋第一中学校 8年 園田 すみれ

私は、平和の旅に参加して原爆の悲惨さについて心が痛くなるほど実感してきました。

1日目には、青少年ピースフォーラムと被爆者の方の講話会に参加しました。講話会では、被爆者の方の家族は原爆が落とされたときは全員無事だったそうですが、放射線を浴びて、がんになってしまったそうです。ピースフォーラムでは、爆撃や爆風によって起こされた被害を見に行きました。爆撃で残った壁の一部の浦上天主堂の遺壁がズレているのを見ることができました。被爆した聖人像・天使像・獅子像などが熱線で黒く焦げ、爆風で頭の部分が取れてしまったり指の部分がなくなったりしていました。

2日目には、平和祈念式典と長崎の観光をしてきました。平和祈念式典では11時2分に黙祷を捧げることができました。平和祈念式典の時に核兵器をなくして平和な世界をつくってほしいなと強く思いました。また、被爆された方の話を聞くことができ今回も想像を絶するほど怖く戦争についてとても考え直させられました。長崎の観光では、出島とグラバー邸に行きました。出島は社会で習っていてどんどこで貿易をしていたのか気になっていて行けて嬉しかったです。昔のボードゲームや砂糖を見ることができて嬉しかったです。グラバー邸は、日本に現存する最古の木造洋風建築で家の中を見ることができて嬉しかったです。長崎の港を見下ろすことができました。

3日目には、献花と長崎原爆資料館に行きました。献花をする時になぜ、関係のない人を巻き込むのだろうと思いました。資料館では、長崎に投下されたファットマンを実物の大ききで見ることができました。私が1番驚いたのは、血がついた服が残っていたことです。服を見た瞬間とてもつらかったです。子供が小さい弟を焼きに行く写真がありました。焼きに行く子供の表情は感情もないようなぼーとした顔をしていました。この写真を見てとても胸が締め付けられました。他にも、爆風の影響で壁に葉っぱの影が映されていたりしました。

この3日間で戦争についてわからなかった部分や初めて知ることがたくさんあってとてもいい経験になりました。早く世界から核兵器をなくしてほしいと思います。そして今回学んだことを学校の人にたくさん伝えて行きたいと思います。

伝えていくことの大切さ

上板橋第二中学校 8年 野村 広葵

1945年8月9日午前11時2分、長崎市上空で炸裂した原子爆弾は、人々の命と生活を奪いました。原爆によって怪我をしたり病気になった人は、当時の長崎市の人口の半分以上にもなったそうです。

私が今回、長崎平和の旅に参加して一番心に残ったことは、青少年ピースフォーラムで被爆体験者の方から聞いたお話です。被爆体験者の三瀬清一郎さんは、被爆当時は10歳で、爆心地から3.6kmの屋内にいたそうです。爆心地から距離が遠かったことと、屋内にいたため当時家族8名は無事だったそうですが、その後放射線の影響によって8人中4人が原爆の後遺症によるがんによって亡くなったそうです。

被爆当時のお話も細かく伺いました。外に出た瞬間、大きなきこ雲があったこと、動物や人間が焼かれ、炭みたいに粉々になっていたこと、放射線を含む黒い雨が降ってきたこと、男女の区別もつかないくらい血だらけで真っ赤になった人が「水をくれ」と叫んでいたこと、「殺してくれ」とわめく人、たくさんの方の遺体があったこと。まさに、「地獄の光景」だったそうです。

私はその話を聞き、たった一発の原子爆弾で何気ない日常や、数え切れないほどの尊い命、多くの建物や長崎の街の風景などが跡形もなく壊れ、なくなってしまったことに言葉が出ませんでした。体験者の方が言われた、「地獄の光景」は想像すると恐ろしく、原爆投下の被害の悲惨さや残酷さは想像以上でした。原子爆弾の被害は、二度とあってはいけない、非人道的なものだということがよくわかりました。

今、被爆体験者の平均年齢は86歳を超えていて、被爆体験者がいなくなる時代が近づいてきているそうです。被爆体験者がいなくなれば、実際の原子爆弾による被害の話を聞くことができなくなります。

僕は、このような被爆体験の話を聞き、原爆の恐ろしさや残酷さ、その後の放射線被害で亡くなった人がたくさんいたことなどを知ることによって、「核兵器は絶対に使ってはならない」と言われる意味が理解できると思いました。実際の被害を知らなければ、自分事として捉えていくことは難しいと感じました。

今後、私は被爆体験者から聞いた話や、その話を聞いて自分が感じたこと、思ったことなどを周りの人や学校の人などに伝え「長崎を最後の被爆地に」を実現するために、これから自分にできることに取り組んでいきたいです。

命と平和を胸に刻んで

上板橋第三中学校 8年 池田 桜彩

22人の仲間と共に、8月8日から10日までの3日間長崎に行き、平和について学ぶ貴重な経験をしました。原爆資料館や平和公園に立ったとき、今まで歴史の出来事として知っていたことが、現実の重みをもって胸に迫ってきました。

特に被爆者の方のお話を聞いたとき、私は心の底から衝撃を受けました。原爆が一発で多くの命を奪い、生き残った人々も黒い雨や食糧不足、後遺症に苦しんだという話は、あまりにも重く、胸が締めつけられました。「二度と繰り返してはいけない」と強く思うと同時に、今の核兵器の威力が増していることを知り、戦争の恐ろしさを改めて実感しました。

式典では、平和宣言の言葉を聞きました。その声が響き渡る中、私は会場を見渡しました。そこには、多くの人が黙って、ただ静かにその言葉を受け止めていました。言葉を交わすわけでもないのに、そこにいる一人ひとりの「二度と悲劇を繰り返さない」という強い願いが、まるで一つになったような、大きな力となって伝わってくるようでした。この場所で被爆者や犠牲になった方々への祈りと一緒に、その場に集まった皆さんと気持ちを共有できたことは、一生忘れられません。

また、原爆が投下された8月9日11時2分に犠牲者の追悼と平和への誓いを込めて1分間の黙祷を行いました。たった1分なのに、とても長く、重い時間を感じました。その沈黙の時間は、私にとって、命を奪われた多くの人々の存在を肌で感じ、今生きている自分の命の重みと向き合った時間でした。

さらに、被爆者の方々の平均年齢が86歳となり、体験を直接語れる人が少なくなっていると知って、危機感を覚えました。時間とともに記憶や思いが薄れてしまうことが怖いと感じました。だからこそ、体験を動画に残す活動などを通して、次の世代にしっかりと伝えていくことが大切だと思いました。私自身も今回学んだことを周りに伝え、平和を守る一員になりたいと強く感じました。

長崎では、教科書だけでは絶対に得られないことを学びました。例えば、”下の川”では、当時、被害を受けた人々が、あまりの喉の渇きに、油が浮いて、ひどく汚れた川の水を飲んでしまうくらい、周りに水がなかったことを知りました。それは想像すると、とても苦しい日々だっただろうと感じました。また、原爆の爆風で片方の柱が吹き飛ばされ一本の柱だけで今でも立ちつづけている片足鳥居を見て、その威力がどれほどのものだったのかを、まざまざと見せつけられたようでした。そんな状況を与えた原爆は本当に恐ろしいと感じました。

この経験は私の心に深く刻まれ、これからの生き方に大きな影響を与えたいと思います。平和の尊さを決して忘れず、次の世代へと伝えていけるよう、これからの自分の行動に責任をもちたいです。

思いを訴えていく決意

桜川中学校 8年 本間 優理

あの日、長崎に原子爆弾が投下されてから 80 年が経った。「長崎を最後の爆地に。」その言葉を聞き、私は 80 年間日本が平和に保たれていることへの恩恵に浴した。

私達は旅の 1 日目でまず青少年ピースフォーラムに参加した。そこでは数少ない被爆者の 1 人、三瀬さんの体験談を拝聴した。当時 10 歳だった三瀬さんは、家族は全員無傷で生きていたが、2 学期になるとクラスの中の友達が何人か死亡していて、生きていた友達からは最初に「おはよ」という挨拶ではなく「よく生きてた、良かった。」と言われたそうだ。また、学校には火傷をした人々が大勢いて、薬が足りていなかった当時は何も治療ができず、次第に死を望む者もでてきたそうだ。私はその話を聞き想像するだけで心が痛み当時の状態がよくわかった。だが三瀬さんは自分の何十倍も心が痛んだのだろうと理解し何年も体験談をしてきた三瀬さんに敬意を抱いた。

2 日目の、平和祈念式典では長崎平和宣言が心に残った。その中でも「人類は核兵器をなくすことができる。」強い希望を胸に、被爆者は声を上げ続けたという言葉が印象に残っている。核兵器は世界に約 12,340 発あると推計されている。私は正直そんな数をなくすことは不可能だと思っていた。しかし、被爆者が演説をし、世界に向けて強く訴えている。その思いは少しでも世界に伝わっているだろうし思いが伝わっていないならば、自分たちも訴えればよいのではないか。平和を壊された被爆者の思いを被爆者が伝えるのが、一番世の中に伝わるだろう。だが、平和を維持している今の私にしか伝えられないものもあるはずだとそう考えた。

3 日目は原爆資料館に行った。そこでは原子爆弾について知ったり、当時の人が身につけていたものや私物を拝見した。右の写真は、当時 14 歳で学校に通いながら戦争のために働いていた少女のお弁当箱だ。原爆投下地点から約 700 メートルの場所にいて彼女は即死。お弁当箱は父親が遺体を探しているときに見つけたそうだ。私は最初、これを見て私と同年の少女が戦争のために働いていたことに驚いた。そして彼女にとってのこの日はいつも通りに働き、親が作ってくれたお弁当を食べ家に帰り家族と寝る。そんな一日を送るつもりだったのだろう。それが一瞬で壊される原爆の恐ろしさと、今私が当たり前に行っていることへの有り難みがよく理解できた。



私はこの旅を通し、被爆者として何年も体験談をしてきた人への敬意を抱いた。またその思いを、訴えていく決意ができた。そして日本全体、いや世界全体に被爆者の思いが伝わることを心から願っている。

長崎平和の旅を終えて

赤塚第一中学校 8年 佐藤 くらら

私は、長崎平和の旅に参加し原爆の恐ろしさや命の尊さ、そして平和の大切さについて深く学ぶことができました。現地に行き、実際に見て聞いて感じたことは、教科書だけでは得られない貴重な体験となりました。

最も心に残っているのは、被爆体験講話です。被爆者の方々が、自らの体験を通して「原爆の悲惨さを伝えたい」「長崎を最後の被爆地にしたい」という強い思いで語ってくださった話は、とても胸に響きました。あの日、普通と変わらない生活をしていた人々の生活が一瞬で奪われたこと、その後も苦しみながら生きていたことに、大きな衝撃を受けました。

8月9日に平和公園で行われた平和式典に参加しました。原爆で亡くなった方々の冥福を祈り、世界に向けて平和を訴えるこの式典では、長崎市長による平和祈念宣言や平和への誓いの言葉を聞くことができました。その中で「地球市民」という言葉がとても印象に残っています。人種や国境をこえて、地球という一つのまちの住民として平和な未来を築いていこうという意味にとっても心が打たれました。

さらに、長崎原爆資料館・追悼平和祈念館を見学しました。原爆が炸裂した時刻で止まった時計や、被爆した服、焼けたお弁当箱など多くのものが展示されていました。その中でも「焼き場に立つ少年」の写真は特に心に残っています。亡くなった弟を背負って火葬を待つ悲しげな少年の姿を見て、戦争の悲惨さを強く感じさせられました。

この旅を通して、過去の出来事を学び、それを周りの人たちに伝えていくこと。そして、今ある日常を当たり前だと思わず、1日1日を大切に生きていくことが、私たちにできることだと気づきました。「長崎を最後の被爆地に」私はこの言葉を忘れず、これからも平和について考え、自分にできることを続けていきたいです。



仲間と語り継ぐ

赤塚第二中学校 8年 樋爪 晴梨

私は、広島「平和の灯」と長崎「誓いの火」をあわせた「平和の火」を見つめながら板橋区役所を出発し、長崎に向かいました。この火は、平和の尊さや戦争の悲惨さを言葉ではなく物で語り継いでいて、重要な役割を担っています。また、板橋区役所正面玄関前には北村西望さんが作った「平和を祈る」像があります。これは、北村さんの生前最後の作品です。

長崎にある平和祈念像も、同じく北村さんが制作したものです。垂直に高く掲げた右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、横にした足は原爆投下直後の長崎市の静けさを、軽く閉じた目は戦争犠牲者の冥福を祈っている姿を意味しています。北村さんが作った2つの像でも、長崎と板橋区の平和への想いがつながっていると思います。

1日目は、青少年ピースフォーラムに参加し、被爆者の方のお話を聞いたり浦上地区のフィールドワークをしたりしました。被爆者の三瀬清一郎さんの「平和は人類共通の世界遺産です」という言葉がとても印象に残りました。浦上地区のフィールドワークでは、実際に被爆した建造物をたくさん見て、改めて原爆は凄まじい威力だったのだと痛感しました。

2日目は平和記念式典に参列しました。式典前は大雨だったけど、始まってからは不思議と天気が落ち着きました。そんな中、式典は長崎市議会議長の岩永敏博氏の式辞で始まり、献水、献花の後に黙とう、長崎市長鈴木史朗氏の長崎平和宣言、被爆者代表西岡洋氏の平和への誓い、児童合唱等が行われました。献水は、原爆が投下されてから約3000度に及んだため、人々は水を欲しがりました。体中やけどを負った人が、水を求めて川に飛び込んだそうです。そのため、平和公園内に「平和の泉」が作られ、式典で行う献水の水も、「平和の泉」をはじめ市内の湧き水を使用しています。また、この式典で特に心を打たれたのが、「ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ・ノーモアウオー・ノーモアヒバクシャ」と鈴木市長が力強く訴えていたところです。この言葉は被爆者の故・山口仙二さんがおっしゃった言葉ですが、長崎市民の平和への想いが強く伝わりました。被爆者合唱の「もう2度と」という歌も、歌詞から同じような想いが伝わりました。

またこの旅で、私は参加した22人全員と仲間になることができました。このため、初めて集まったメンバーでも、核兵器廃絶や平和という共通の想があればすぐに仲間になれるということを感じることができました。22人の新しい仲間たちと一緒に長崎に行けて良かったです。平和の尊さ、戦争の悲惨さを実際に現地に行って共に学んだからには11月の「平和のつどい」で平和の火を持ちパレードすることで、新しい仲間と地域の方や学校の皆に伝えていくという使命を新たにしたいです。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

世界に平和の種を

赤塚第三中学校 8年 小向 風夏

「しっぽもひと役」永井隆博士の言葉だ。この言葉にはこのような意味がある。

「人にはそれぞれ役割がある。決して余計な人はいない。あなたにもあなたの役割がある。私にも私の役割がある。」私はこの言葉に、深く共感できた。

たくさんのかげがえのない命を一瞬にして失った、80年前の広島、長崎で起きた原爆。今の日本は平和だ。今の若者は戦争の恐ろしさを知らない。私自身も、もちろん知らなかった。私はこの夏、長崎平和祈念式典に参加した。平和祈念式典では、違う国から参加してきた人や参加するためにやってきた中学生たち、いろんな人達がそこには集まっていた。式典では、市議会議長や市長、被爆者などの人たちの戦争に対する強い気持ちが感じられた。「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」この言葉は被爆者の心の叫びそのものだ。もう二度と原爆を落としてはいけない。もう二度と戦争をしてはいけない。もう二度と被爆者を作ってはいけない。当時の人々の様子が頭に思い浮かぶ言葉だ。あの日あの時におきたことは巻き戻せない。いくら願ったって、失われた命は帰ってこない。もうそのようなことを私はおきないでほしいと願う。もう戦争をやめよう、核兵器をなくそうと日本で立ち上がった団体、「日本原水爆被害者団体協議会」がノーベル賞を昨年取った。私はこの取り組みに対し、素晴らしいと思い感謝している。これからの未来は我々人類が作っていくもの。どのような未来になるかは私達に託されている。私はこの「板橋区長崎平和の旅」で原爆の恐ろしさ、人や平和の尊さ、戦争はしてはいけないものだということなどを改めて学べた。被爆者のお話では、「殺してくれ」と頼む人、「水をくれ」と水を求めてやってくる人、地獄のような体験をした当時の人々の状況が伝わり、聞くのが辛くなった。私達人類にできることはなにか。それは人によってできる量は限られてくるが、中学生にもできることがある。それは、原爆についてより深く知ること、被爆者の話や平和を願う人の話を聞き、学校や大勢の人々の前で平和について発表すること、平和を心の底から祈ること。このようなことができるのではないかと私は思う。世界を平和にするには、多くの世界の人々の力が必要だ。「平和」それは人類が心から願っていること。世界を平和にするためにもたくさんの人に原爆について知ってもらいたい。今の世の中は「当たり前ではない」とわかってもらいたい。誰一人いない人なんていない。みんなに幸せに生きてほしい。あなたの尊い命を守りたい。私はたくさん世界の人々と、世界に平和の種をたくさんうめたい。そしてその花を咲かせ、たくさんの折り鶴が舞う誰もが幸せな平和な世界に変えていきたい。

平和は当然じゃない

高島第一中学校 8年 伊東 美翔

皆さんが考える「平和」とはどのようなものでしょうか。私は「平和」という言葉の意味、そして重さを平和の旅で改めて考えました。

被爆者である三瀬さんの語る“あの日”の記憶は私にとって、とても衝撃的でした。80年前である、1945年8月9日11時2分、長崎県長崎市松山町の上空500mで原爆が炸裂し、突然の閃光、燃え上がる炎に一瞬にして長崎の街は包まれました。三瀬さんは、当時小学5年生だったそうです。『太陽が街に落ちてきた』と錯覚したというその瞬間の恐怖、性別がわからなくなるほど、体が焼けて、血だらけの人々の姿、そして、自分の学校が火葬場になっていた現実。その言葉を聞いたたび、胸が締め付けられます。

戦争の惨めさは、ただ悲しいだけでなく、日常を根こそぎ奪うものであり、失われた命や希望の重さを言葉にすることすら難しいのだと感じました。

2学期になり、学校が再開された際も、そこには被爆し、亡くなった友達の席が空いたままだったそうです。また、自らの手で、校庭に落ちている骨を拾う作業。子どもたちの手で行わなければならなかったその現実、戦争の悲惨さを痛感しました。更に、食料がなく、食べることもままならなかった日々。その経験から、三瀬さんは今でも食料を大切にしよう、ご飯粒を一粒も残さず食べる習慣を大切にしていると言います。命の尊さを肌で知った証です。

また、1960年にご結婚された後も、被爆者の子どもたちには障害が出るのではという噂があり、被爆者という差別や偏見にさらされたこともあったそうです。戦争の被害は目に見える傷だけではなく、次の世代にも影響を及ぼし、社会的な不公平や苦しみとして残る。その悲惨さは、時間が経っても消えることはありません。

そして、悲惨な体験を後世へと伝え続けている今も、核兵器の数は80年前の数千倍になっているという現実。科学が進み、便利になった世界でさえ、人間は同じ過ちを繰り返す可能性を抱えています。だからこそ、平和の価値を知り、それを守る責任が私達一人ひとりにあるのだと思います。

「平和」とはただ戦争が無い状態ではなく、当たり前のように生活できること。誰もが安心して生きられる世界のことだと考えます。

だからこそ、私達は、その平和の種を様々な人や場所にまき、満開に育てていく必要があります。

被爆者の方々が訴えてきた想い、そして長崎で見た史実。私はそれを忘れずに生きていきたい。そして、「平和は人類共通の世界遺産である (Peace is a world heritage to be shared by all humanity .)」ということのをこれからも伝え続けていきたいと思います。

平和祈念式典に参加して

高島第二中学校 8年 辻村 滋人

今年は広島と長崎に原子爆弾が投下されてから80年です。この節目の年に私は板橋区中学生長崎平和の旅に参加しました。2025年8月9日、私は平和祈念式典に参加しました。会場には私達のように他の自治体から派遣された学生たち、遠くの国から来た外国の方が見られました。11時2分。原子爆弾が炸裂した瞬間に合わせて鐘がなり、黙祷が行われました。そのとき、自然と原子爆弾が投下されたときのことを感じました。黒くなった空、バラバラになった建物、水を求め亡くなった人々のことです。黙祷が終わってからも複雑な感情のままでした。

長崎市長の話で心に残っているのは「地球市民」という言葉でした。

「この言葉には、人種や国境の垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。」

長崎市長の言葉に感銘を受けました。地球市民同士が手を取り合い、話し合いや交流をし、力を合わせなければ平和な未来などはつくることができないと感じました。世界規模で様々な意見が衝突し、核兵器の使用が危ぶまれるこの時代だからこそ、この「地球市民」という言葉が大切なのではないかと考えました。

式典で自らの被爆体験を語られた西岡洋さんは、爆心地から3.3キロの中学校で被爆されました。「級友たちの下敷きになったおかげで、無傷で済んだのです。」と投下直後の状況を話され、それだけではなく帰宅の途中で見た街の状況、終戦後も続く後遺症についても話されました。最後に西岡さんは自らが所属する「日本被団協」が昨年にノーベル平和賞を受賞され「これは私たちの活動が世界平和に確立に寄与していることが評価されたということにほかなりません。」と話され、核兵器の不使用や平和を願う話をされました。

今回、私は平和の旅に参加して核兵器のない社会、平和な社会について、旅に出る前とは違う考えを持ち、学びを経験することができました。美しい長崎、そしてこの世界を「地球市民」である私達が守るためには、一人ひとりが平和について考え、行動していかななくてはなりません。一人の「地球市民」の行動が平和な未来の基礎をつくり上げていくのではないのでしょうか。

最後に板橋区中学生長崎平和の旅という素晴らしい機会を与えてくださり、支援していただきました板橋区総務課の方々をはじめ、引率の先生方、学校の先生方、長崎市の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。今回は本当にありがとうございました。

あの夏を繋ぐ

高島第三中学校 8年 柴田 愛海

1945年8月9日、長崎に落とされた一発の原子爆弾によってどれだけの尊い命が失われたことだろうか。そして、どれだけの恐怖を、苦痛を、悲しみを人々に植え付けたことだろう。それらを知るために、私たち22名は板橋区の代表として、日本に住む未来を継ぐ者として長崎へ向かった。

平和の旅は3日間という短い期間だが、極めて多くのことを学べた。一日目、二日目、三日目と続く中で戦争についてよく考えさせられた。中でも、一日目の青少年ピースフォーラムと二日目の平和祈念式典は印象に残るものであった。

ピースフォーラムでは、被爆当時10歳であった三瀬さんの体験講話を拝聴した。三瀬さんは被爆前から被爆後までの体験を事細かに語ってくださった。被爆してしまった人々の遺体は焼け爛れ、黒焦げになってしまっていたそうだ。私は三日目の原爆資料館で当時の写真を見たが、そのひどい体の状態に戦慄した。言葉では表せないほど悲惨な怪我をおっている人や家族の遺体を見つけ、呆然と立ち尽くしている人の姿もあった。その光景は、きっと運よく生き残ったとしてもその先には地獄しかなかったのだと思わせるほどだった。また、三瀬さんは講話の最初と最後にこう言われた。「平和は人類共通の世界遺産」平和をつくるためにはまずコミュニケーションが大切であると。一日目のこの出来事からそれまで以上に、私達はこの日のことを知っていかなければならないと強く感じた。

そして迎えた二日目の平和祈念式典。式典が始まる前、滝のような雨が降る中で私達は会場へ向かい、椅子に座っていた。雨が降る音で周りの音が聞こえないほどで、式典は大丈夫かと心配するほどであった。しかし、不思議なことに式典が始まる前には少し前の大雨が嘘かのように雨はやんでいた。そんな中で始まった平和祈念式典。原爆が投下されたという現地で私達は1分間という短い黙祷をした。短い時間だがその静かな空間では様々な思いが飛び交っていたことだろう。式典の中での、式辞、平和宣言、平和への誓い、そのすべての言葉は核兵器の悲痛さが伝わり、平和について考えさせられるものだった。戦争は終わったのに、原爆による後遺症で命を落とす人は後を絶たず、原爆による見えない恐怖は戦後にもそして今にも続いている。あの日、何も知らずにただ一方的に苦しめられ、死んでいった人々は原爆さえなければ今も生きていたのだろうか。そう考えると胸が締め付けられるような思いだ。そんな、なかったことにしたい、けれど忘れられない、忘れてはいけないことだと訴えかけられているように感じた時間だった。

その日から80年という時がたった。長崎は原爆の悲しみを抱えながらも復興を果たし、世界中に伝えてくれている。あの悲しみを、あの辛さを。だから私達も向き合わなければならない。今回の平和の旅で学べたことを私達なりの伝え方で繋げていけたらと思った。

第3部 資料編

被爆80周年

Commemorating 80 years since the atomic bombing

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

令和 7 年(2025年) 8 月 6 日

August 6, 2025

広 島 市

The City of Hiroshima

式 次 第

Program

開 式	8 : 00	Opening
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8 : 00	Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式 辞 広島市議会議長	8 : 03	Address Chairperson of the Hiroshima City Council
献 花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来 賓	8 : 08	Dedication of Flowers Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8 : 15	Silent Prayer and Peace Bell
平和宣言 広島市長	8 : 16	Peace Declaration Mayor of Hiroshima
放 鳩		Release of Doves
平和への誓い こども代表	8 : 24	Commitment to Peace Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8 : 29	Addresses Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8 : 46	Hiroshima Peace Song (chorus)
閉 式	8 : 50	Closing

平和宣言

今から80年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を茶毘に付した被爆者がいました。「死んでもいいから水を飲ませて下さい！」と声を振り絞る少女に水をあげなかったことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、独身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話をしてみるのが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約9割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲慘な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらす得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際心に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自国のことのみに専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではなく、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の中でできることを見つけ、行動することです。広島市は、皆さんが「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がっていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみに専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいないでしょうか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないですか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和都市のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の8,500を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促していきます。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに応え、「ヒロシマの心」を体現することにほかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全に陥りかねないNPT（核兵器不拡散条約）が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後ろ盾になるはずです。是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第1回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が86歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆80周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和7年（2025年）8月6日

広島市長 松 井 一 實

令和 7 年 8 月 9 日
August 9, 2025



被爆 80 周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 80th Nagasaki Peace Ceremony

式 次 第		Program
被爆者合唱	1 0 : 4 0	Chorus by A-bomb Survivors
開 式	1 0 : 4 5	Commencement
原爆死没者名奉安	1 0 : 4 6	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式 辞	1 0 : 4 8	Opening Address
献 水	1 0 : 5 2	Water offering
献 花	1 0 : 5 4	Flower offering
黙 と う	1 1 : 0 2	Silent prayer
長崎平和宣言	1 1 : 0 3	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	1 1 : 1 2	Pledge for Peace
児 童 合 唱	1 1 : 1 9	Children's chorus
来 賓 挨 拶	1 1 : 2 4	Addresses
合唱 千羽鶴	1 1 : 4 0	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉 式	1 1 : 4 5	Closing words

目		次	
会場案内図……………	1 ページ	平和への誓い……………	9 ～10 ページ
被爆者合唱……………	2	児 童 合 唱……………	11
司会者名・献水の採水場所…………	2	千羽鶴（歌）……………	12
原爆死没者名簿登載者数…………	2	長崎市民平和憲章……………	13 ～ 14
式 辞……………	3 ～ 4	長崎平和宣言＜ことばの解説＞…	15 ～ 18
長崎平和宣言……………	5 ～ 8	平和祈念式典会場周辺図…………	19

長 崎 市
City of Nagasaki



被爆80周年特設サイト

長崎平和宣言

1945年8月9日、このまちに原子爆弾が投下されました。あの日から80年を迎える今、こんな世界になってしまうと、誰が想像したでしょうか。

「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください。対立と分断の悪循環で、各地で紛争が激化しています。

このままでは、核戦争に突き進んでしまう。そんな人類存亡の危機が、地球で暮らす私たち一人ひとりに、差し迫っているのです。

1982年、国連本部で被爆者として初めて演説した故・山口仙二さんは、当時の惨状をこう語っています。

「私の周りには目の玉が飛び出したり 木ギレやガラスがつきささった人、首が半分切れた赤ん坊を抱きしめ泣き狂っている若いお母さん 右にも 左にも 石ころのように死体がころがっていました。」

そして、演説の最後に、自らの傷をさらけ出しながら、世界に向けて力強く訴えました。

「私の顔や手をよく見てください。世界の人々 そしてこれから生まれてくる子供たちに私たち被爆者のような 核兵器による死と苦しみを 例え一人たりとも許してはならないのであります。」

「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ

ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」

この心の底からの叫びは、被爆者の思いの結晶そのものです。

証言の力で世界を動かしてきた、被爆者たちの揺るがぬ信念、そして、その行動が評価され、昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しました。日本被団協が結成されたのは、1956年。心と体に深い傷を負い、差別や困窮にもがき苦しむ中、「自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おう」という結成宣言をもって、長崎で立ち上がりました。

「人類は核兵器をなくすことができる」。強い希望を胸に、声を上げ続けた被爆者の姿に、多くの市民が共感し、やがて長崎に「地球市民」という言葉が根付きました。この言葉には、人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。

この「地球市民」の視点こそ、分断された世界をつなぎ直す原動力となるのではないのでしょうか。

地球市民である、世界中の皆さん。

たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。被爆者は、行動でそう示してきました。

はじめの一步は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。これは、私たち市民社会の大きな役割です。

私たちには、世界共通の言語ともいえるスポーツや芸術を通じて、また、発達した通信手段を使って、地球規模で交流する機会が広がっています。

今、長崎で、世界約8,500都市から成る平和首長会議の総会を開いています。市民に最も身近な政府である自治体も絆を深め、連帯の輪を広げています。

地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。

地球市民の一員である、すべての国の指導者の皆さん。

今年は、「戦争の惨禍を繰り返さない」という決意のもと、国連が創設されてから80年の節目でもあります。今こそ、その礎である国連憲章の理念に立ち返り、多国間主義や法の支配を取り戻してください。

来年開催される核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議は、人類の命運を左右する正念場を迎えます。長崎を最後の被爆地とするためには、核兵器廃絶を実現する具体的な道筋を示すことが不可欠です。先延ばしは、もはや許されません。

唯一の戦争被爆国である日本政府に訴えます。

憲法の平和の理念と非核三原則を堅持し、一日も早く核兵器禁止条約へ署名・批准してください。そのためにも、北東アジア非核兵器地帯構想などを通じて、核抑止に頼らない安全保障政策への転換に向け、リーダーシップを発揮してください。

平均年齢が86歳を超えた被爆者に、残された時間は多くありません。被爆者の援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

原子爆弾で亡くなられた方々とすべての戦争犠牲者に、心から哀悼の誠を捧げます。

被爆80年にあたり、長崎の使命として、世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に「長崎を最後の被爆地に」するために、地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていくことをここに宣言します。

2025年（令和7年）8月9日

長崎市長 **鈴木 史 朗**

板橋区平和都市宣言記念事業

○中学生平和の旅

次代を担う中学生の皆さんに被爆地である広島及び長崎に訪れていただき、平和式典や広島市及び長崎市主催の平和事業への参加を通じて、平和について考えていただくものです。

○平和絵画・原爆展、平和展

次代を担う小・中学生が「平和と戦争」をテーマに描いた、絵画・ポスターの優秀作品、戦災関係資料等を展示しています。今年度は「平和絵画・原爆展」は8月8日から区役所本庁舎及び赤塚支所で開催、「平和展」は3月10日の東京都平和の日にあわせて区内商業施設等で開催いたします。

○板橋平和のつどい

毎年11月上旬に区立文化会館大ホールで実施しています。内容は参加者全員による「板橋区平和都市宣言」の朗読、中学生平和の旅に参加した皆さんの体験発表、朗読会や映画の上映等を行っています。

○板橋の空襲資料映像「板橋の空襲～語り継ぐあの日のこと～」

平成20年度に制作した、板橋の空襲資料映像「板橋の空襲～語り継ぐあの日のこと～」の動画が下記により視聴できます。是非ご覧ください。

①板橋区ホームページから

トップページ ⇒ 区のできごと「動画配信サービス」 ⇒ 「総務課チャンネル」

②URL

<http://www.youtube.com/watch?v=pnnWgh97To8>

※QRコード読み取り機能のある携帯電話・

スマートフォンをお持ちの方は、こちらから→



刊行物番号 R07-70

編集・発行 板橋区平和都市宣言記念事業実行委員会
(板橋区・板橋区議会)

事務局 板橋区総務部総務課総務係
東京都板橋区板橋二丁目66番1号
TEL03-3579-2052

世界の平和は区民の願い、
